

第20表 遺物觀察表（古代・中世 4/8）

番号	種別	器種・部品	部位	直徑 (mm)	厚さ (mm)	測量・後注等	色調		胎土の特徴	備考	
							内	外			
354	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.55)	—	回転ナデ	ナデ	灰白 稲	淡黄緑	4 mm以下の褐色
355	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.8)	—	回転ナデ	ナデ	稻	—	3 mm以下の褐色・褐色
356	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.2)	—	回転ナデ	ナデ	淡黄緑	—	3 mm以下の褐色・褐色
357	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(5.5)	—	回転ナデ	ナデ	淡黄緑	—	褐色な白色・褐色
358	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.5)	—	回転ナデ	ナデ	淡黄緑	淡黄緑	淡褐色な白色
359	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.8)	—	回転ナデ	ナデ	淡黄緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
360	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.5)	—	回転ナデ	ナデ	淡黄緑	—	3 mm以下の褐色・褐色
361	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.7)	—	回転ナデ	ナデ	淡黄緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
362	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.1)	—	モガキ	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—
363	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.7)	—	モガキ	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—
364	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(5.8)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
365	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.3)	—	モガキ	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—
366	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.5)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
367	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.9)	—	モガキ	モガキ	灰青緑	—	1 mm以下の褐色・褐色
368	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(13.3)	—	モガキ	モガキ	灰青緑	—	褐色な白色
369	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(15.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
370	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(10.3)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	1 mm以下の褐色・褐色
371	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(12.0)	—	回転ナデ	(風化)風化	モガキ	—	2 mm以下の褐色・褐色
372	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(5.7)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
373	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(5.7)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
374	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
375	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.5)	—	回転ナデ	モガキ	淡黄緑	淡黄緑	褐色無色透明板
376	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(5.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
377	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.2)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
378	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
379	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.3)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
380	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.1)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
381	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.2)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
382	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
383	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
384	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.7)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
385	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.6)	—	ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
386	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(6.5)	—	ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
387	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.2)	—	ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
388	土師器	1層剥離・底盤	皿形	(10.1)	(5.5)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
389	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(6.4)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
390	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(6.4)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
391	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(6.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
392	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(6.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
393	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(6.6)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
394	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(7.4)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
395	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(7.1)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
396	土師器	1層剥離・底盤	皿形	—	(6.5)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
397	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	(7.2)	—	回転ナデ	モガキ	灰青緑	—	2 mm以下の褐色・褐色
398	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ヨコナデ スス付着	ヨコナデ スス付着	モガキ	—	2 mm以下の褐色・褐色
399	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ヨコナデ	ケズリ	明赤	明赤	2 mm以下の褐色・褐色
400	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ヨコナデ ナデ	ケズリ ナデ	明赤	明赤	2 mm以下の褐色・褐色
401	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ナデ	ケズリ ナデ	明赤	明赤	2 mm以下の褐色・褐色
402	土師器	1層剥離・底盤	皿形	(20.8)	—	—	ヨコナデ ナデ	ケズリ ヨコナデ	モガキ	モガキ	2 mm以下の褐色・褐色
403	土師器	1層剥離・底盤	皿形	(25.0)	—	—	ヨコナデ ナデ	ケズリ ヨコナデ	モガキ	モガキ	2 mm以下の褐色・褐色
404	土師器	1層剥離・底盤	皿形	(34.0)	(24.6)	(11.6)	ヨコナデ ナデ ソス付着	ケズリ ヨコナデ ソス付着	モガキ	モガキ	2 mm以下の褐色・褐色
405	土師器	高台付壇 底盤	D-501	—	—	—	回転ナデ	モガキ	モガキ	モガキ	2 mm以下の褐色・褐色
406	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ナデ 指サエ	指サエ	白目板	モガキ	2 ~ 5 mmの若色
407	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ナデ 指サエ	指サエ	白目板	モガキ	2 ~ 5 mmの若色
408	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ナデ 指サエ	指サエ	白目板	モガキ	1 mm以下の灰白色
409	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ナデ 指サエ	指サエ	白目板	モガキ	1 mm以下の灰白色・灰白色
410	土師器	高台付壇 底盤	皿形	—	—	—	ナデ 指サエ	指サエ	白目板	モガキ	1 mm以下の灰白色・灰白色
411	土師器	高台付壇 底盤	皿形	11.4	6.7	4.8	回転ナデ ハラナカ付	回転ナデ	モガキ	モガキ	2 mm以下の褐色
412	土師器	高台付壇 底盤	皿形	(12.0)	(6.6)	4.65	回転ナデ ナデ	回転ナデ	モガキ	モガキ	1 mm以下の灰白色
413	土師器	高台付壇 底盤	皿形	12.6	5.8	4.9	回転ナデ ハラナカ付	回転ナデ	モガキ	モガキ	2 mm以下の灰白色

第21表 遺物觀察表（古代・中世 5/8）

番号	種別	器形・部品	部位	直徑 (mm)	厚さ (mm)	測定・後述等	色調		胎土の特徴	備考
							内面	外面		
414	土師器	井	口縁	12.0	5.8	4.6 回転ナメ ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛透明な白色 1 mm以下の薄色	墨書き器
415	土師器	井	口縁	14.0	7.2	4.3 ヘラ切きのあとナメ	回転ナメ スス材村	にぬ・相 にぬ・相	1 mm以下の薄色、灰白色 2 mm以下の薄色	墨書き土器
416	土師器	井	口縁	12.6	—	— 回転ナメ (風化気泡)	回転ナメ (風化気泡)	浅黄相 浅黄相	無鉛な薄色、薄色相	墨書き土器 (東)
417	土師器	井	口縁	—	—	— 回転ナメ	回転ナメのあとミガキ	相 相	にぬ・相 にぬ・相	男房土器 1 mm以下の薄色
418	土師器	口縁部	口縁	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	にぬ・相 にぬ・相	男房土器 1 mm以下の薄色
419	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 mm以下の赤褐色	墨書き土器 (東)
420	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛薄色相	墨書き土器
421	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 ~ 2 mmの大いな黄褐色	墨書き土器
422	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 mm弱の薄色相	男房土器 1 mm以下
423	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	2 mm以下の褐色	墨書き土器
424	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	2 mm以下の赤褐色	墨書き土器
425	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメのあとミガキ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	1 mm以下の赤褐色、白色相	墨書き土器 1 mm以下の薄色 (西)
426	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	明赤相 明赤相	1 mm弱の薄色相	墨書き土器
427	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	明赤相 明赤相	ガラス質分 無鉛白色相	墨書き土器
428	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	1 mm弱の明褐色	墨書き土器
429	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛褐色化相	墨書き土器
430	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ (風化気泡)	回転ナメ (風化気泡)	浅黄相 浅黄相	無鉛薄色相	墨書き土器
431	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛な薄色、赤褐色	墨書き土器
432	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	3 mmの大いな褐色	墨書き土器 (東) (西)
433	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	5 mm以下の赤褐色	墨書き土器 (東)
434	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	1 mm前後の赤褐色	墨書き土器 (東) (西)
435	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメのあとミガキ	浅黄相 にぬ・相	2 mmの大いな褐色	墨書き土器 (東)
436	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	浅黄相 浅黄相	1 mm以下の赤褐色	墨書き土器 (東)
437	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 mm以下の白色相	墨書き土器
438	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	1 mmの大いな褐色	墨書き土器 (東)
439	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛白色相	墨書き土器
440	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	2 mmの大いな褐色	墨書き土器 (東)
441	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	2 mmの大いな褐色	墨書き土器 (東)
442	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメのあとミガキ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	2 mmの大いな褐色	墨書き土器 (東)
443	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	5 mm弱の暗赤褐色	墨書き土器
444	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛白色相	墨書き土器
445	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ (やや風化気泡)	回転ナメ (やや風化気泡)	浅黄相 浅黄相	1 mm前後の赤褐色	墨書き土器 (東) (西)
446	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 ~ 5 mmの大いな褐色	墨書き土器 (東) (西)
447	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	1 mmの大いな褐色	墨書き土器
448	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	9 mm弱のにぬ・相褐色、黒色相	墨書き土器
449	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 mm以下の暗赤褐色	墨書き土器
450	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	4 mmの大いな褐色	墨書き土器
451	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛褐色化相	墨書き土器
452	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ (風化気泡)	回転ナメ	相 相	1 mmの大いな褐色	墨書き土器
453	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	2 mmの大いな褐色	墨書き土器
454	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	2 mmの大いな褐色	墨書き土器
455	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 mm以下の暗赤褐色	墨書き土器
456	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	1 mm以下の暗褐色	墨書き土器
457	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	含有物少	墨書き土器
458	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	2 mm以下の赤褐色	墨書き土器
459	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	無鉛白色相	墨書き土器
460	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ (風化著しい)	回転ナメ	浅黄相 浅黄相	無鉛白色相 2 mmの大いな褐色	墨書き土器
461	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	含有物少	墨書き土器
462	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ (風化著しい)	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	2 mm以下の褐色	墨書き土器
463	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	相 相	含有物少	墨書き土器
464	土師器	井	口縁部	—	—	— 回転ナメ	回転ナメ	浅黄相 浅黄相	無鉛白色相	墨書き土器
465	土師器	井	口縁部	—	5.8	— ヘラ切き底	回転ナメ ヘラ切き底	浅黄相 浅黄相	1 mm以下の赤褐色、灰色相	墨書き土器
466	土師器	井	口縁部	—	6.7	— ヘラ切き底	回転ナメ ヘラ切き底	浅黄相 浅黄相	にぬ・相 にぬ・相	墨書き土器
467	土師器	井	口縁部	—	5.3	— ヘラ切きのあとナメ	回転ナメ	相 相	1 mm以下の薄色相	墨書き土器 (東) (西)
468	土師器	井	口縁部	—	7.1	— ヘラ切き底	回転ナメ	相 相	含有物少	墨書き土器
469	土師器	井	口縁部	—	—	— ヘラ切きナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	1 mm以下の赤褐色	墨書き土器
470	土師器	井	口縁部	—	—	— ヘラ切きのあとナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	ガラス質の無鉛褐色化相	墨書き土器
471	土師器	井	口縁部	—	—	— ヘラ切きのあとナメ	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	1 mm以下の暗褐色	墨書き土器
472	土師器	井	口縁部	—	—	— ヘラ切き底	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	含有物少	墨書き土器
473	土師器	井	口縁部	—	5.4	— ヘラ切き底	回転ナメ	にぬ・相 にぬ・相	ガラス質の透明褐色相	墨書き土器

第22表 遺物觀察表（古代・中世 6/8）

番号	種別	器形・部品	部位	直徑 (mm)	厚さ (mm)	測定・後注等	色・調			出土の時例	備考
							内	外	裏		
474	土師器	陶片～破片	皿	7.1	—	回転ナメ ナメ	回転ナメ	にぬ・黄褐色	にぬ・黄褐色	4 mm以下の黒色粒	関東土器 (10) 東
475	土師器	陶片～破片	皿	8.6	—	回転ナメ ナメ	回転ナメ	浅黄褐色	にぬ・黄褐色	4 mm以下の黒色粒 黒色の底に白い色斑	関東土器 (II)
476	土師器	白磁片～断片	皿	39.6	—	ナメ 平行タキ	平行タキ	灰	灰	0.5mm以下の黒色粒	
477	土師器	骨	皿	17.6	—	ナメ 平行タキ	平行タキ	灰灰	灰灰	3 mm以下の黒色。まれに5 mmの大黒点	
478	土師器	白磁片～断片	皿	17.8	—	ナメ 平行タキ	平行タキ	灰灰	灰灰	3 mm以下の黒色。白い色斑	
479	土師器	骨	皿	—	—	勝手口ナメ	平行タキ	灰白	灰白	白色透明。根毛	
480	土師器	骨	皿	—	(13.8)	平行タキ ナメ	平行タキ	灰	灰	黒褐色	
481	土師器	骨	皿	—	(21.3)	ヨコナメ ナメ	ヨコナメ 平行タキ 略か凹凸	灰	灰	黒褐色の黑色・灰色・灰褐色斑	
482	土師器	骨	皿	—	(21.3)	平行タキ	平行タキ	灰白	灰白	2 mm以下の黒色・灰色	
483	土師器	白磁片～断片	皿	—	(21.3)	平行タキ	平行タキ	灰白	灰白	3 mm以下の黒色・灰色	481と同一鉢
484	土師器	骨	皿	—	(11.6)	ヨコナメ 平行タキ	ヨコナメ 平行タキ	灰白	灰白	黒褐色の黑色・灰色・褐色・米沢紋	
485	土師器	白磁片～断片	皿	—	(17.6)	平行タキ	平行タキ	灰	灰	黒褐色	
486	土師器	骨	皿	—	(18.1)	ヨコナメ ナメ	ヨコナメ 平行タキ	灰	灰	黒褐色の黑色・灰色・灰褐色斑	
487	土師器	骨	皿	—	(18.3)	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	2 mm以下の黒色	
488	土師器	骨	皿	—	—	ヨコナメ 平行タキ	ヨコナメ 平行タキ	灰白	灰白	3 mm以下の黒色	
489	土師器	骨	皿	—	—	ナメ ヨコナメ	ナメ ヨコナメ	灰白	灰白	白色透明	
490	土師器	骨	皿	—	(20.3)	ヨコナメ ナメ	ヨコナメ ナメ	灰	灰	1 mm以下の黒色・灰色・白色	
491	土師器	陶片～破片	皿	12.2	—	回転ナメ ナメ	回転ナメ	灰	灰	根毛	
492	土師器	骨	皿	—	—	ナメ	ナメ	灰白	灰白	2 mm以下の黒色・黑色粒	
493	土師器	小学校	皿	—	(5.11)	10回ナメ ナメ	10回ナメ ナメ	灰白	灰白	黒褐色の黑色・灰色・褐色	
494	土師器	小学校	皿	—	(7.6)	10回ナメ ナメ	10回ナメ ナメ	灰白	灰白	2 mm以下の黒色	
495	土師器	小学校	皿	—	—	ヨコナメ ナメ	ヨコナメ 平行タキ	灰白	灰白	3 mm以下の黒色	
496	土師器	白磁片	皿	—	(9.11)	回転ナメ ナメ	回転ナメ ナメ	灰	灰	根毛	
497	土師器	白磁片	皿	—	(9.31)	ヨコナメ ナメ	ヨコナメ ナメ	灰白	灰白	黒褐色の黑色	
498	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	2 mm以下の黒色・黑色粒	
499	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	黒褐色の黑色・灰色	
500	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	2 mm以下の黒色	
501	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	3 mm以下の黒色	
502	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	4 mm以下の黒色	
503	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	5 mm以下の黒色	
504	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	6 mm以下の黒色	
505	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	7 mm以下の黒色	
506	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	8 mm以下の黒色	
507	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	9 mm以下の黒色	
508	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	10 mm以下の黒色	
509	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	11 mm以下の黒色	
510	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	12 mm以下の黒色	
511	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	13 mm以下の黒色	
512	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	14 mm以下の黒色	
513	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	15 mm以下の黒色	
514	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	16 mm以下の黒色	
515	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	17 mm以下の黒色	
516	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	18 mm以下の黒色	
517	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	19 mm以下の黒色	
518	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	20 mm以下の黒色	
519	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	21 mm以下の黒色	
520	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	22 mm以下の黒色	
521	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	23 mm以下の黒色	
522	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	24 mm以下の黒色	
523	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	25 mm以下の黒色	
524	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	26 mm以下の黒色	
525	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	27 mm以下の黒色	
526	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	28 mm以下の黒色	
527	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	29 mm以下の黒色	
528	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	30 mm以下の黒色	
529	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	31 mm以下の黒色	
530	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	32 mm以下の黒色	
531	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	33 mm以下の黒色	
532	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	34 mm以下の黒色	
533	土師器	白磁片	皿	—	—	回転ナメ	回転ナメ	灰白	灰白	35 mm以下の黒色	

第23章 遺物觀察表（古代・中世 7/8）

第24表 遺物觀察表（古代・中世 8/8）

第25表 遺物觀察表（近世）

番号	種別	器物・部品	部位	重量 (g)	測量・後法等		色	調査・後法等	出土の特徴	備考		
					横径	縦径	高さ	内	外			
690	角器	口縁部・底部	SC3	(11.3) 4.6	7.25	回転ナット 施錠 施錠 ナット	回転ナット 施錠	明鏡灰 に凸・黃褐色	に凸・黃褐色	精良	内野山室	
691	角器	口縁部・底部	SC3	(10.0)	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	に凸・黃褐色	に凸・黃褐色	精良		
692	角器	口縁部・底部	SC3	(11.3)	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	明小鏡灰	便	精良		
693	白磁	口縁部・底部	SC2	(17.0) (7.6)	6.7	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良		
694	角器	底部	SC1	—	29.4	—	ナット 施錠	ナット	黒褐色	灰褐色	2 mm以下の白色灰	濃厚
695	角器	底部	SC2	(31.0) (11.7)	14.2	ナット 施錠 砂目 施錠	回転ナット 施錠 砂目	オリーブ黒	黒褐色	1 mm以下の白色灰	濃厚	
696	角器	口縁部・底部	SC2	(32.7)	—	ナット 施錠 砂目 施錠	回転ナット 施錠 砂目	黒褐色 に凸・赤褐色	に凸・赤褐色	精良	濃厚	
697	角器	口縁部・底部	SC2	(33.0)	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰褐色	灰白	1 mm以下の灰白色灰	濃厚	
698	角器	口縁部・底部	SC3	(30.2) (22.6)	9.85	回転ナット ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠	暗赤褐色	暗赤褐色	2 mm以下の明褐色灰・に凸・黃褐色 色・淡赤褐色・淡黄色		
699	角器	口縁部・底部	SC3	(37.0)	—	ナット 施錠 砂目 施錠	ナット 施錠	黒褐色	黒褐色	精良		
700	陶器	口縁部・底部	SC3	—	(18.0)	回転ナット ナット 大入砂目	ナット スリット着 砂目	明黄褐色	に凸・橙			
701	陶器	底部	SC1	—	—	回転ナット 施錠	回転ナット ナット 施錠 砂目	黒褐色	明褐色	明褐色	濃厚	
702	陶器	口縁部・底部	SC1	9.6	4.35	回転ナット 施錠 (底入)	回転ナット 施錠 (底入)	灰褐色	灰褐色	1 mm以下の灰白色灰	灰褐色	
703	陶器	口縁部・底部	SC1	11.15	4.4	5.0	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠 砂目	灰褐色	灰褐色	灰褐色	濃厚
705	陶器	口縁部・底部	SC1	(11.0) 5.0	6.95	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠 砂目	灰オーリーブ	灰褐色	精良		
706	陶器	口縁部・底部	SC1	—	4.65	—	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠 砂目	灰褐色	明褐色	機能的な透明灰灰・白色・灰色・黑 色灰	
707	陶器	底部	SC1	—	5.0	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠 砂目	灰褐色	灰褐色	1 mm以下の暗色・黑色・白色灰		
708	陶器	口縁部・底部	SC1	—	(7.6)	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	濃厚
709	陶器	口縁部・底部	SC1	—	(3.0)	—	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠 砂目	灰白	灰白	精良	
710	陶器	口縁部・底部	SC1	—	4.7	—	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠 砂目	オリーブ黒	灰褐色	精良	内野山室
711	陶器	底部	SC1	—	9.85	—	回転ナット 施錠 (底入)	回転ナット 施錠 (底入)	浅黃	灰褐色	機能灰色	灰褐色
712	陶器	口縁部・底部	SC1	(12.1)	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	浅黃	浅黃	1 mm以下の黄褐色・暗褐色灰		
713	陶器	口縁部・底部	SC1	(14.0)	—	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	暗赤褐色	暗赤褐色	精良	
714	陶器	手拭 (29) 口縁部・底部	SC1	11.0	6.8	3.9	ナット 指子サエ	ナット 指子サエ	に凸・赤褐色	暗赤褐色	2 mm以下の暗色灰・1 mm以下の黑 色・黑色透明光沢粘物	
715	陶器	土押口	SC1	—	—	—	ナット 施錠	ナット 施錠	御手サエ	灰褐色	1 mm以下の半透明光沢灰黃色灰	
716	陶器	底部	SC1	(12.0)	—	—	回転ナット (風化灰葉) 施錠 砂目	回転ナット 施錠 砂目	灰褐色	灰褐色	2 mm以下の灰白色灰	機能
717	陶器	口縁部・底部	SC1	(29.5)	—	—	ナット 施錠 砂目 (3条)	ナット 施錠	機能	灰白		
718	陶器	底部	SC1	—	—	—	ナット 施錠	ナット 施錠	オリーブ黒	灰褐色	精良	
719	陶器	口縁部・底部	SC1	—	—	—	ナット 工芸ナット 施錠 実物	ナットのあとナット 施錠	切削灰	暗赤褐色	1 mm以下の白色灰	
720	磁器	口縁部・底部	SC1	10.2	3.9	6.0	回転ナット 施錠 (底入)	回転ナット 施錠 (底入)	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
721	磁器	口縁部・底部	SC1	10.4	4.3	5.8	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠	明鏡灰	明鏡灰	肥厚系 磁材	
722	磁器	口縁部・底部	SC1	9.6	(4.0)	5.8	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠	明鏡灰	明鏡灰	肥厚系 磁材	
723	磁器	口縁部・底部	SC1	(10.7) (3.7)	5.75	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	肥厚系 磁材	
724	磁器	口縁部・底部	SC1	(10.0)	—	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠 (底入)	明鏡灰	明鏡灰	肥厚系 磁材	
725	磁器	底部	SC1	—	(4.7)	—	回転ナット 施錠 砂目	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
726	磁器	底部	SC1	(10.5) (3.0)	6.05	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
727	磁器	口縁部・底部	SC1	7.3	3.45	6.0	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
728	磁器	口縁部・底部	SC1	—	(6.0)	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
729	磁器	口縁部・底部	SC1	(4.0) (4.1)	4.35	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
730	磁器	口縁部・底部	SC1	(5.7) (3.6)	4.3	—	回転ナット 施錠 砂目	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
731	磁器	口縁部・底部	SC1	(6.4) (2.7)	4.65	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
732	磁器	口縁部・底部	SC1	—	—	—	回転ナット 施錠 (一部底入)	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
733	磁器	底部	SC1	—	(12.6)	—	回転ナット 施錠 施錠	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
734	磁器	口縁部・底部	SC1	(12.0) (7.0)	3.65	—	回転ナット 施錠 砂目	回転ナット 施錠 (底入)	灰白	灰白	精良	肥厚系 磁材
735	磁器	口縁部・底部	SC1	—	—	—	回転ナット 施錠 砂目	回転ナット 施錠	明鏡灰	明鏡灰	精良	肥厚系 磁材
736	磁器	口縁部	SC1	—	—	—	回転ナット 施錠 帆織り	回転ナット 施錠	灰白	灰白	精良	型紙
737	磁器	底部	SC1	—	4.2	—	回転ナット 施錠	回転ナット 施錠 (砂目)	灰白	灰白	精良	

## 第V章 自然科学分析

### 第1節 土器圧痕について

本遺跡で出土した土器の中から植物種子や動物遺存体と考えられる土器圧痕を12点掲載した。以下、作業記録と観察の結果については別表を参照されたい。

第1表 土器圧痕探査の作業記録

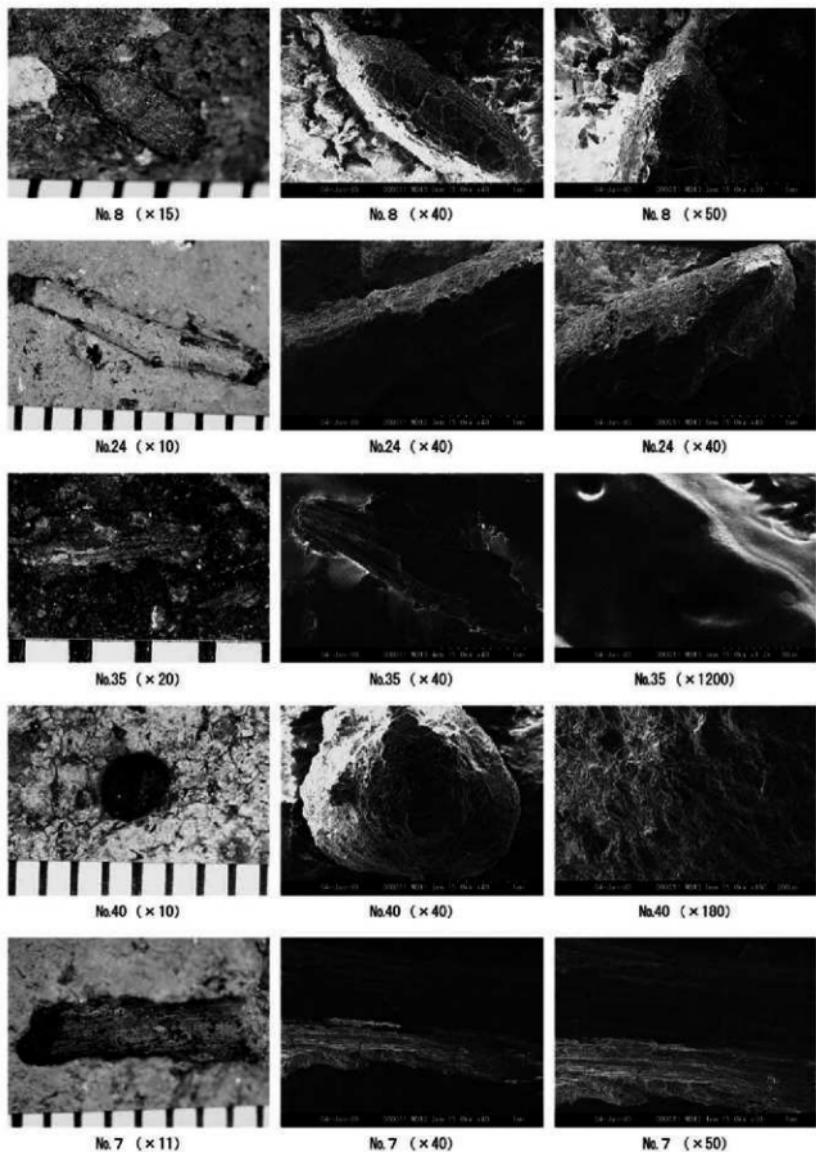
作業項目		作業の記録						
選別と観察		整理作業(水洗・注記・接合)時に圧痕の可能性のあるものを肉眼観察で選別した。はじめ団みのある土器について整理作業員に注意を払うよう指示し、可能性のある土器片を抽出した。その後、胎土鉢物の観察と並行して、それらを実体顕微鏡(Nikon・ニキチャースコープ・ファーブル)により20倍の倍率で観察し識別した。観察の結果、岩石や火山灰等の含む物が抜けた落ちたものではないと想定した圧痕を示す。						
観察と記録		抽出した12点の土器圧痕について観察と記録を行った。観察は、主に10~63倍まで行える実体顕微鏡(Nikon paf)を用い、記録は顕微鏡にDIXデジタルカメラを装着させ、NikonのCamera Control Proを使用して記録を行った。その後、資料をレプリカ法により電子顕微鏡(HITACHI S-3000N)を用いて観察と記録を行った。なお、詳細な観察状況は観察表を参照されたい。						

第2表 土器圧痕観察表

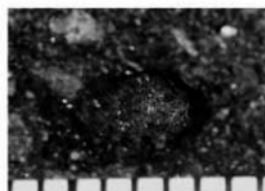
区 分	地 質	種 類	位置 面	圧痕観察記録		判定結果	区 分	地 質	種 類	位置 面	圧痕観察記録		判定結果
				No.	特 徴	指 定					No.	特 徴	指 定
S	泥質 陶器	表 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。先端にはツバのような痕跡が認められる。全体としてビード状のくびれ状態がある。左側の底面部分は明確である。 【同定標識】ツバは、前後方向の底面が施釉面と直上の相違。上部の点線部が凹凸である。特徴として、左側の底面が施釉面と直上の相違。上部の点線部が凹凸である。特徴として、左側の底面が施釉面と直上の相違。上部の点線部が凹凸である。	7	早 原 土	壓 痕 觀 察 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。先端にはツバのような痕跡が認められる。全体としてビード状のくびれ状態がある。左側の底面部分は明確である。 【同定標識】ツバは、前後方向の底面が施釉面と直上の相違。上部の点線部が凹凸である。特徴として、左側の底面が施釉面と直上の相違。上部の点線部が凹凸である。	植物の葉	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。先端にはツバのような痕跡が認められる。全体としてビード状のくびれ状態がある。左側の底面部分は明確である。 【同定標識】ツバは、前後方向の底面が施釉面と直上の相違。上部の点線部が凹凸である。特徴として、左側の底面が施釉面と直上の相違。上部の点線部が凹凸である。	植物の葉			
23	繩文 陶器	表 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	13	早 原 土	壓 痕 觀 察 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	植物の葉	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	不明	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	植物の葉	不明
A	泥質 陶器	表 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	44	稻 庭 土	壓 痕 觀 察 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	植物の葉	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	木片	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	植物の葉	木片
35	繩文 陶器	表 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	57	稻 庭 土	壓 痕 觀 察 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	種子	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	不明	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。 【同定標識】長軸方向に施釉面と非施釉面がある。	種子	不明
49	繩文 陶器	表 面	【現状】直径2.5mmの円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。 【同定標識】左側の表面に明瞭な特徴がある。	74	稻 庭 土	壓 痕 觀 察 面	【現状】直径2.5mmの円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。 【同定標識】左側の表面に明瞭な特徴がある。	不明	【現状】直径2.5mmの円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。 【同定標識】左側の表面に明瞭な特徴がある。	不明	【現状】直径2.5mmの円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。 【同定標識】左側の表面に明瞭な特徴がある。	不明	不明
109	高 代	表 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。長軸方向を呈す。右側の表面に明瞭な特徴がある。	76	稻 庭 土	壓 痕 觀 察 面	【現状】長軸3.5mm円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。 【同定標識】左側の表面に明瞭な特徴がある。	イネ	【現状】長軸3.5mm円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。	イネ	【現状】長軸3.5mm円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。	イネ	植物の葉
401	高 代	表 面	【現状】長軸3.5mm円形。表面凹凸なし。長軸方向を呈す。右側の表面に明瞭な特徴がある。						【現状】長軸3.5mm円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。		【現状】長軸3.5mm円形の痕跡を呈す。高密度で左側の表面に明瞭な特徴がある。		植物の葉

観察の結果は、植物の茎3点、種子4点、木片1点、種子状の不明圧痕2点、不明1点、コクゾウムシ1点であった。種子の内、102・401の2点は9~10世紀の初圧痕、その他の2点は縄文晚期の資料であるが種の同定には及ばない。また、本遺跡の圧痕資料は縄文早期～中世の土器器まで存在する。つまり、粘土を使用するものであれば、全てが研究対象となる。また、県内の圧痕資料を概観すると弥生時代以降の圧痕には、イネの圧痕に偏りが見られる。これは、初圧痕が識別しやすく意識が向かい易いという探査時の問題があるものの、それだけが原因ではないだろう。今後、イネ以外の圧痕の探査とともに検討しなければならない課題の一つであり、研究の深化が期待される。

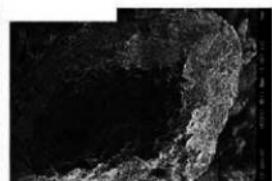
註1) レプリカ法については、福岡市埋蔵文化財センターにて事前指導を受け、柳田がレプリカ作成を官崎県埋蔵文化財センターにて行った。また、走査電子顕微鏡(SEM)の観察については、官崎県総合農業試験場の溝辺真氏の協力の下、同試験場にて柳田が行った。なお、レプリカに使用した溶剤や手順については、福岡市埋蔵文化財センター「付」土器圧痕レプリカ法作業の手引き」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第25号を参照されたい。



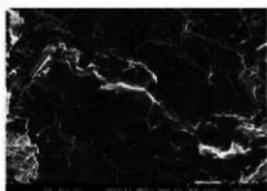
土器圧痕拡大写真1 (縄文土器 A区 : 8・24・35・40、B区 : 7)



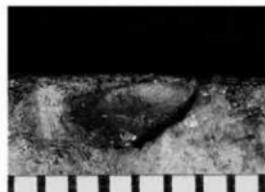
No.13 (×10)



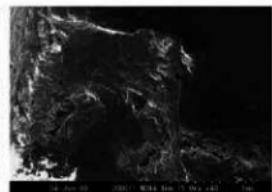
No.13 (×10)



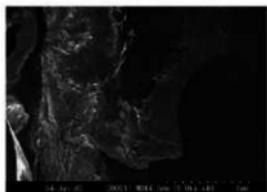
No.13 (×500)



No.57 (×10)



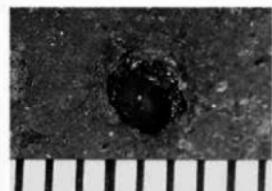
No.57 (×40)



No.57 (×40)



No.44 (×10)



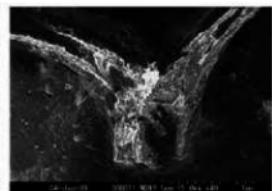
No.74 (×10)



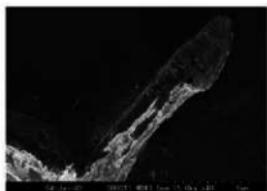
No.74 (×24)



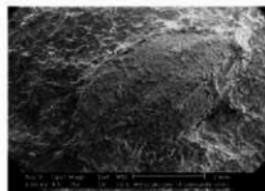
No.76 (×11)



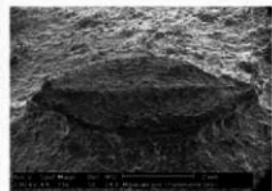
No.76 (×40)



No.76 (×40)



No.102 (×15)



No.102 (×15)



No.401 (×10)

土器压痕拡大写真2 (縄文土器: B区13・44・57・74・76、古代甕: A区102、B区401)

## 第2節 筆無遺跡B区におけるテフラおよび植物遺存体分析

株式会社 古環境研究所

### 土層とテフラ

#### 1 はじめに

宮崎県城南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、霧島、姶良、鬼界、桜島、池田湖などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺跡の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができる。

そこで都城市筆無遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取した試料を対象としてテフラ検出分析と屈折率測定を行って、指標テフラの検出同定を試みることになった。調査分析が行われた地点は、B区（D2地点）のJ17・K16・M16グリッドの3地点および調査区北壁（第4地点）の合計4地点である。

#### 2 土層の層序

##### （1）第1地点 < M16grid >

第1地点では、下位より黄色砂質細粒火山灰層（層厚3cm以上）、褐色土（層厚4cm）、暗灰色土（層厚7cm）、細粒の褐色軽石を少量含む黒色土（層厚17cm、軽石の最大径3mm）、黄色軽石混じり黒色土（層厚9cm、軽石の最大径11mm）、黄色軽石層（層厚28cm、軽石の最大径19mm、石質岩片の最大径3mm）が認められる（図1）。

これらのうち最下位の黄色砂質細粒火山灰層については、層相から約7,300年前（暦年較正年代、以下同様）に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978）に同定される。また、黄色軽石層については、層相から約4,600年前に霧島火山御池火口から噴出したと考えられる霧島御池テフラ（Kr-M、町田・新井、1992、2003、奥野、1996）に同定される。

##### （2）第2地点 < K16grid >

第2地点では、下位より暗灰褐色土（層厚17cm以上）、黄色軽石に富む暗灰褐色土（層厚15cm、軽石の最大径9mm）、黄色軽石混じりでより色調が暗い暗灰褐色土（層厚18cm、軽石の最大径5mm）、成層したテフラ層（層厚25cm）、わずかに灰色がかかった褐色土（層厚7cm）、暗灰褐色土（層厚9cm）、黒色土（層厚17cm）、黄色軽石に富む黒褐色土（層厚14cm、軽石の最大径16mm）が認められる（図1）。

これらのうち、暗灰褐色土中に多く含まれる黄色軽石については、層位や岩相などから、約8,000年前に桜島火山から噴出した桜島11テフラ（Sz-11、小林、1986、町田・新井、2003、桜島嫁坂軽石：早田、1997）と考えられる。また成層したテフラ層は、下部の褐色火山豆石混じり軽石層（層厚4cm、軽石の最大径11mm、火山豆石の最大径5mm）と、上部の黄橙色砂質細粒火山灰層（層厚21cm）からなる。

このテフラ層は、層相からK-Ahに同定される。さらに、最上位の黒褐色土中に多く含まれている黄色軽石については、層位や岩相からKr-Mに由来すると考えられる。

##### （3）第3地点 < J17grid >

第3地点では、下位より黄色軽石層（層厚15cm以上、軽石の最大径12mm）、黄色軽石に富む灰褐色土

(層厚22cm、軽石の最大径11mm)、黄色軽石を多く含む暗灰褐色土(層厚27cm、軽石の最大径5mm)、黄色軽石混じり暗灰褐色土(層厚40cm、軽石の最大径9mm)、黒灰褐色土(層厚32cm)、若干硬い暗灰褐色土(層厚17cm)、暗灰褐色土(層厚27cm)、黄灰色軽石層(層厚11cm、軽石の最大径13mm)、石質岩片の最大径3mm)、黄灰色軽石に富む暗灰褐色土(層厚31cm、軽石の最大径8mm)が認められる(図1)。

これらのうち最下位の黄色軽石層は、層相からKr-MIに同定される。また黄灰色軽石層については、層相から1471(文明3)年に桜島火山から噴出した桜島3テフラ(Sz-3、小林、1986、町田・新井、1992、2003)と考えられる。

#### (4) 第4地点 <17grid>

第4地点では、泥質の黒褐色土(層厚40cm以上)の上位に、成層したテフラ層(層厚25cm)が認められる。このテフラ層は、下部のかすかに成層し若干黄色がかった白色軽石層(層厚24cm、軽石の最大径9mm)と、上部のわずかに黄色がかった灰白色砂質細粒火山灰層(層厚1cm)からなる。このテフラ層は、層相からSz-3に同定される。

### 3 テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

基本的に5cmごとに設定採取された試料のうち、第1～3地点の21点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

#### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。第1地点では、試料6から試料4にかけて、ごくわずかに灰色がかった白色の細粒軽石(最大径2.1mm)が含まれている。試料3より上位では黄白色軽石が認められるが、この軽石は上位の軽石層に多く含まれているものである。火山ガラスとしては、試料1を除くいずれの試料にも、透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスや軽石型ガラスが含まれている。この火山ガラスはとくに試料9に多い。このほか、試料8から試料7にかけては白色の軽石型ガラス、試料6から試料4にかけてはごくわずかに灰色がかった白色軽石の細粒物、試料3や試料2には黄白色軽石の細粒物である軽石型ガラスが各々認められる。

第2地点では、試料6に光沢をもつ白色軽石(最大径2.9mm)がごく少量含まれている。試料4から試料1にかけては、ごくわずかに灰色がかった白色の細粒軽石(最大径2.2mm)が少量ずつ含まれている。火山ガラスとしては、透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスや軽石型ガラスが含まれている。このほか、試料6および試料4～試料1に白色の軽石型ガラスが含まれている。

第3地点では、試料31の軽石層に黄白色軽石が多く含まれている。またこの軽石は試料5にかけて(上方にむかって)次第に減少する傾向にある。試料13および試料9には、暗褐色スコリア質細粒火山灰が含まれている。とくに試料9には、少量ながら黒褐色のスコリア粒子(最大径2.0mm)が認められる。試料1には、比較的粗粒の黄灰色軽石(最大径11.4mm)がとくに多く含まれている。

## 4 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

第2地点の試料2に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置(古澤地質製、MAIOT)により屈折率測定を行った。

### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。第2地点の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )はbimodalで、1.498–1.501と1.509–1.513の値が得られた。

## 5 考察

第2地点の試料2に含まれる火山ガラスの多くは、火山ガラスの特徴や屈折率から、約2.6~2.9万年前に姶良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物(A-Ito, 荒牧, 1969)やそれに関係する姶良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995)、およびK-Ahに由来すると考えられる。bimodalな屈折率のうち、低い値のガラスの多くがA-ItoやAT、高い値のガラスがK-Ahに由来すると考えられる。

また、この試料をはじめとして、Kr-Mの下位の土壌に含まれているごくわずかに灰色がかった白色の細粒軽石については、その岩相から約6,400年前に池田湖カルデラから噴出した池田湖テフラ(Ik, 成尾・小林, 1983, 町田・新井, 2003)に由来する可能性が高い。この層準には、角閃石も少量ながら認められる。今回は量が少なく白色軽石型ガラスのみの測定は困難であったが、ATの火山ガラスの屈折率の一部は、Ikのそれ( $n$ : 1.501–1.502, 町田・新井, 2003)とも重複することから、この試料に含まれる細粒の白色軽石型ガラスがIkに由来する可能性も完全には否定できない。

第3地点の試料13や試料9に含まれるスコリア粒子やスコリア質の粗粒火山灰については、霧島火山に由来する可能性が考えられる。とくに試料9に含まれるより粗粒のスコリアについては、その特徴から10~13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア(Kr-ThS, 井ノ上, 1988, 早田, 1997)と考えられる。なお最近では、このスコリアの年代を1235(嘉禎元)年とする説もある(奥野ほか, 2000, 町田・新井, 2003)。

## 6まとめ

テフラ分析の結果、下位より桜島11テフラ(Sz-11, 約8,000年前: 历年較正年代、以下同様)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)、霧島御池テフラ(Kr-M, 約4,600年前)、霧島高原スコリア(Kr-ThS, 10~13世紀)、桜島3テフラ(Sz-3, 1471年)が認められた。また、K-AhとKr-Mの間に池田湖テフラ(Ik, 約6,400年前)の層位がある可能性も指摘された。

## 文献

- 荒牧重雄(1969)鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物、地質雑誌、75, p.425–442。  
池田晃子・東野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州、姶良カルデラ起源の大崩落下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による<sup>14</sup>C年代、第四紀研究、34, p.377–379。  
井ノ上幸造(1988)霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史、岩盤、83, p.25–41。  
小林哲夫(1986)桜島火山の形成史と火砕流、文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害」(研究代表者: 荒牧重雄), p.137–163。  
町田洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義、科学、46, p.339–347。  
町田洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰、第四紀研究、17, p.143–163。

- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会、276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史磨 (1987) 始良Tn火山灰(AT) の<sup>14</sup>C年代、第四紀研究、26, p.79-83.
- 村山雅史・松木英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 輝彦 (1993) 四国沖ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—ターンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の<sup>14</sup>C年代、地質雑誌、99, p.787-798.
- 成尾英仁・小林哲夫 (1983) 鹿児島県指宿地域の火山活動史—阿多火砕流以降について、日本地質学会第90年学術大会講演要旨集、p.309.
- 奥野 充 (1996) 南九州の第四紀末テフラの加速器<sup>14</sup>C年代 (予報)、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書、VII, p.89-109.
- 奥野 充・福島太輔・小林哲夫 (2000) 南九州のテフロクロノロジー—最近10万年間のテフラー、人類史研究、12, p.9-23.
- 奥野 充 (2002) 南九州に分布する最近約3万年間のテフラーの年代学的研究、第四紀研究、41, p.311-316.
- 早田 敏 (1997) 火山灰と土壤の形成、宮崎県史通史稿1, p.33-77.

表1 テフラー検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
第1地点	2	+	黄白	3.8	++	pm>bw	黄白, 白, 透明, 淡褐, 褐
	3	+	黄白	3.2	++	pm>bw	黄白, 白, 透明, 淡褐, 褐
	4	+	白	2.0	++	pm,bw	白, 透明, 淡褐, 褐
	5	+	白	2.0	++	pm,bw	白, 透明, 淡褐, 褐
	6	+	白	2.1	++	bw>pm	透明, 淡褐, 褐, 白
	7	-	-	-	+++	bw>pm	透明, 淡褐, 褐, 白
	8	-	-	-	+++	bw>pm	透明, 淡褐, 褐, 白
	9	-	-	-	++++	bw>pm	透明, 淡褐, 褐, 白
第2地点	1	+	白	2.1	++	pm,bw	白, 透明, 淡褐, 褐
	2	+	白	2.1	++	pm,bw	白, 透明, 淡褐, 褐
	3	+	白	2.1	++	pm,bw	白, 透明, 淡褐, 褐
	4	+	白	2.2	++	bw>pm	透明, 淡褐, 褐, 白
	5	-	-	-	++	bw>pm	透明, 淡褐, 褐
	6	+	白	2.9	++	bw>pm	透明, 淡褐, 褐, 白
第3地点	5	+	黄白	3.1	++	pm>bw	黄白, 透明, 淡褐
	9	+	黄白>黒灰	3.1,2,0	++	pm>sc,bw	黄白, 暗褐, 透明, 淡褐
	13	+	黄白	3.0	++	pm>sc,bw	黄白, 暗褐, 透明, 淡褐
	19	+	黄白	6.6	++	pm	黄白, 白
	23	++	黄白	3.8	+++	pm	黄白
	27	++	黄白, 白	4.7	+++	pm	黄白, 白
	31	+++	黄白, 白	5.8	++++	pm	黄白, 白

++++: とくに多い、 +++: 多い、 ++: 中程度、 +: 少ない、 -: 認められない。

最大径の単位は、mm。 bw: バブル型、 pm: 軽石型、 sc: スコリア型

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)
第2地点	2	1.498-1.501, 1.509-1.513

屈折率の測定は湿度一定型屈折率測定装置 (MAIOT) による。

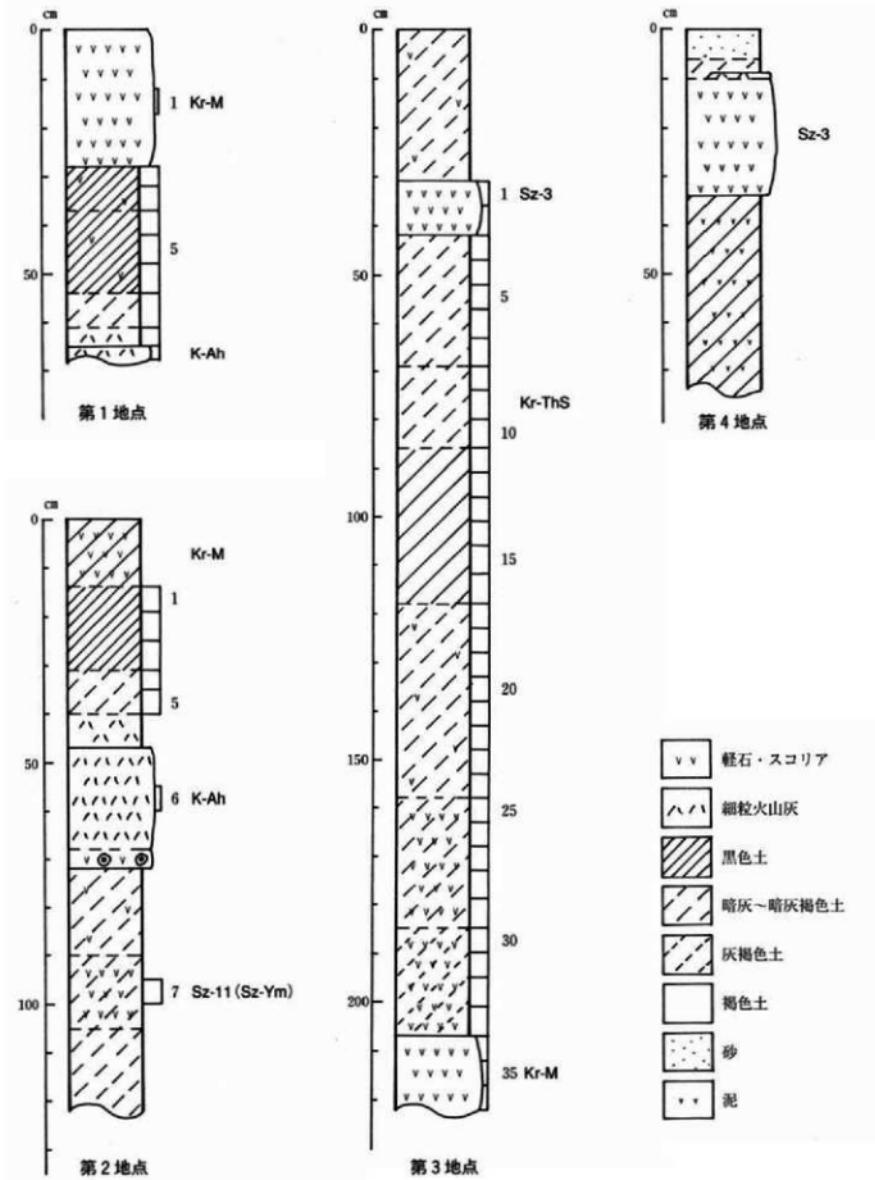


図1 土層柱状図（スケールは任意、右側の数字はテフラ分析の試料番号）

## 植物珪酸体分析

### 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オバール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

### 2 試料

分析試料は、第3地点から採取された9点および第4地点から採取された1点の計10点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1 gに対し直径約40 μmのガラスピーズを約0.02 g添加  
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10–5 g）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### 4 分析結果

#### （1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

### 【イネ科】

イネ、キビ族型、ヨシ属、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）  
【イネ科—タケア科】

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チャキザサ節型（ササ属チャキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

### 【イネ科—その他】

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

### 【樹木】

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

## （2）植物珪酸体の検出状況

### 1) 第3地点（図1）

下位の試料33～27では、ヨシ属が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、およびコナラ属などの樹木起源も少量検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山、1999）。試料21～19では、ネザサ節型が増加しており、ヨシ属は減少している。試料13では、メダケ節型やネザサ節型が大幅に増加しており、ヨシ属はさらに減少している。また、同層準ではイネが出現している。イネの密度は3,400個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。試料9～3でもおおむね同様の結果であるが、ネザサ節型はしだいに減少している。イネの密度は2,800～3,500個/gと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、下位の試料33～27ではヨシ属が卓越しており、試料21～19ではヨシ属とネザサ節型、試料13より上位ではメダケ節型とネザサ節型が優勢となっている。

### 2) 第4地点（図2）

Sz-3直下層（試料1）では、ネザサ節型が多量に検出され、イネ、ヨシ属、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、スキ属型、ウシクサ族A。樹木（その他）なども少量検出された。イネの密度は4,700個/gと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢であり、イネ、メダケ節型、ネザサ節型も多くなっている。

## 5 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

霧島御池テフラ（Kr-M、約4,600年前）直上層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはキビ族やメダケ属（メダケ節やネザサ節）などが分布していたと推定される。また、遺跡周辺にはコナラ属などの樹木が生育していたと考えられる。

霧島高原スコリア（Kr-ThS、10～13世紀）の下層にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）やスキ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが拡大したと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地はしだいに減少したと推定される。また、Kr-ThSの下層の時期には、調査地点もしくはその近辺で稲作が開始されていたと考えられる。同層ではメダケ節やネザサ節が多量に検出されているが、これらの植物が耕作地内に生育していたことは考えにくいことから、周辺に生育していた植物が堆肥や灰など何らかの形で耕作地に持ち込まれたことも想定される。

Kr-ThS混層から桜島3テフラ（Sz-3、1471年）直下層にかけても、おおむね同様の状況であったと考えられ、継続的に稲作が行われていたと推定される。なお、第4地点のSz-3直下層ではヨシ属が多量

に検出されることから、この時期には部分的に湿地的な状況になっていた可能性が考えられる。これは、同層準でカヤツリグサ科が優勢となっている花粉分析の結果（第III章）と整合している。

#### 文献

- 杉山真二（1987）タケ亞科植物の機動細胞壁酸体、富士竹類植物圖報告、31, p.70-83.  
 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史、第四紀研究、38(2), p.109-123.  
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.  
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科學、9, p.15-29.  
 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科學、17, p.73-85.

表1 筆無遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地点・試料		第3地点							第4地点	
		3	9	13	19	21	27	29	31	33	1	
イネ科	Gramineae (Grasses)											
イネ	<i>Oryza sativa</i>	35	28	34								47
キビ族型	<i>Panicoides</i> type			14	23	14	7	7				7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	14	7	7	29	43	69	77	79	84		87
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	63	50	96		36						20
ウシクサ族A	<i>Andropogonace A</i> type	35	50	90	63	64	14	42	14	7		47
ウシクサ族B	<i>Andropogonace B</i> type			14		14		7				7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)											
メダケ節型	<i>Pleiodelphus</i> sect. Nipponocalamus	252	92	317	69	85	62	84			14	133
ネダサ節型	<i>Pleiodelphus</i> sect. Nezasa	540	644	986	283	306	117	91	22	14		394
チャキダサ節型	<i>Sasa</i> sect. Sasa etc.			21	6	21	21	7	7			
ミヤコダサ節型	<i>Sasa</i> sect. Crassinodi	7	7	21	29	14	14	21	22			
未分類等	Others	126	120	62	63	50	27	42	43			
その他イネ科	Others											
表皮毛起源	Husk hair origin	28	42	34	29	21	27	7	36	7		27
棒状珪酸体	Rod-shaped	687	517	731	410	342	241	140	166	196		394
茎部起源	Stem origin				14	6			14			27
未分類等	Others	406	432	276	490	512	502	412	375	399		601
樹木起源	ArboREAL											
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>					7						
クスノキ科	<i>Lauraceae</i>			7								
マンサク科(イスノキ属)	<i>Dipteridium</i>						7					
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped ( <i>Quercus</i> etc.)						7	7				7
その他の	Others						7					7
植物珪酸体地数	Total	2193	2009	2709	1500	1544	1107	950	765	875		1795

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>·cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.03	0.83	1.01								1.37
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.88	0.45	0.43	1.82	2.69	4.34	4.85	5.01	5.30		5.47
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.78	0.61	1.20		0.44						0.25
メダケ節型	<i>Pleiodelphus</i> sect. Nipponocalamus	2.93	1.07	3.68	0.80	0.99	0.72	0.97				1.55
ネダサ節型	<i>Pleiodelphus</i> sect. Nezasa	2.59	3.09	4.73	1.36	1.47	0.56	0.44	0.10	0.07		1.89
チャキダサ節型	<i>Sasa</i> sect. Sasa etc.			0.16	0.04	0.16	0.15	0.05	0.05			
ミヤコダサ節型	<i>Sasa</i> sect. Crassinodi	0.02	0.02	0.06	0.09	0.04	0.04	0.06	0.06			

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleiodelphus</i> sect. Nipponocalamus	53	26	43	35	37	49	64		71		45
ネダサ節型	<i>Pleiodelphus</i> sect. Nezasa	47	74	55	59	55	38	29	47	29		55
チャキダサ節型	<i>Sasa</i> sect. Sasa etc.			2	2	6	10	3	24			
ミヤコダサ節型	<i>Sasa</i> sect. Crassinodi	0	1	1	4	2	3	4	29			

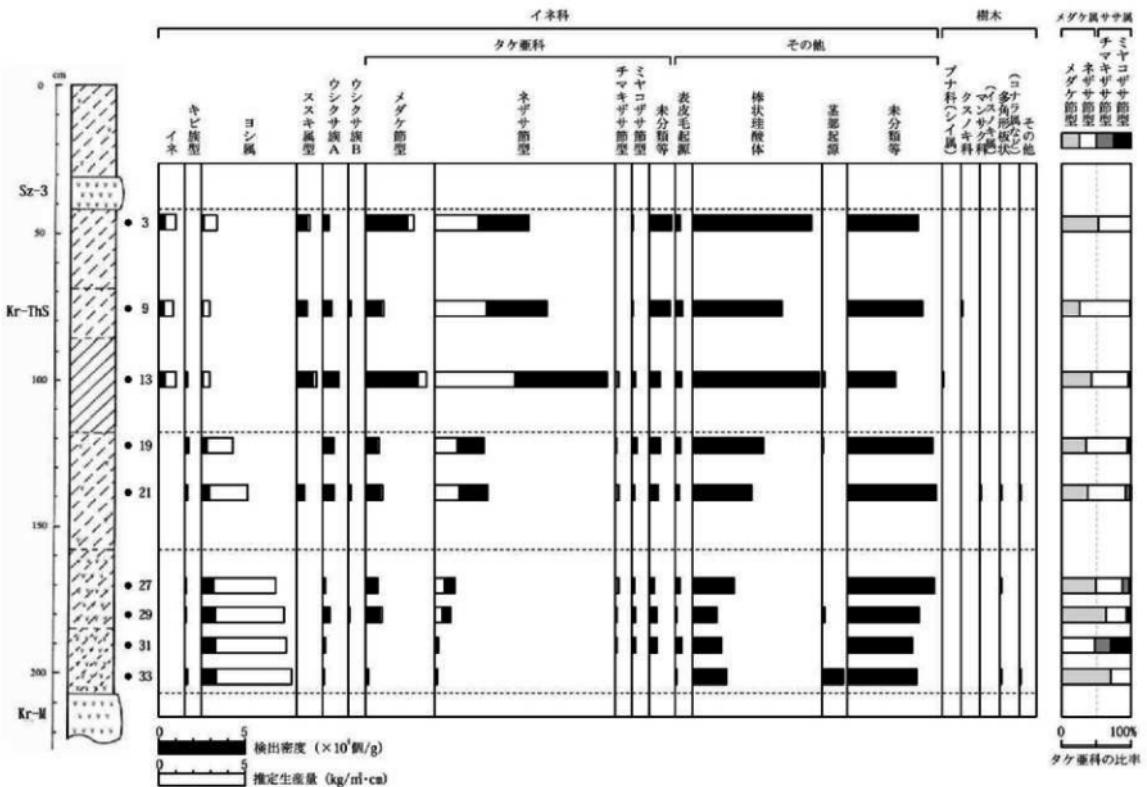


図1 第3地点における植物硅酸体分析結果

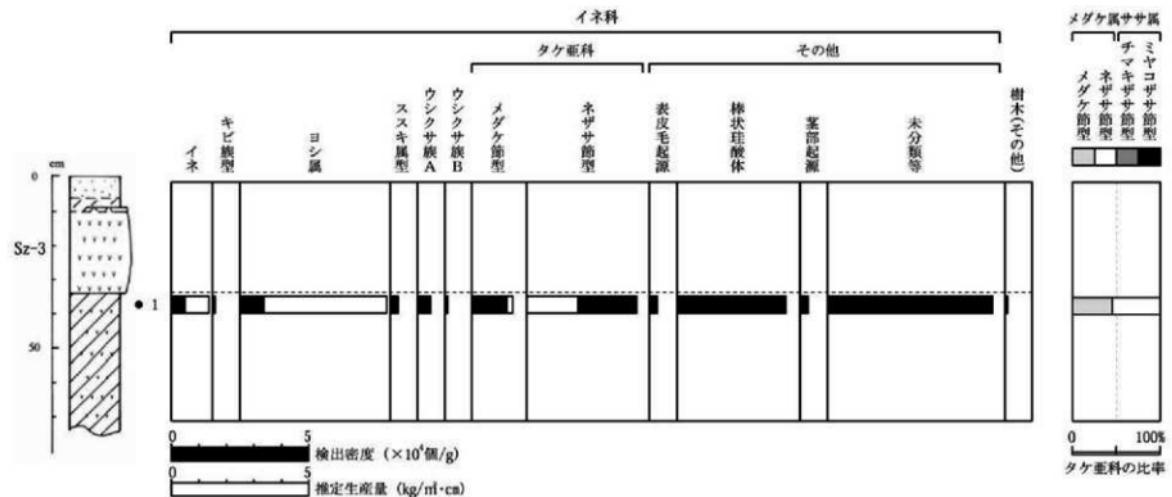
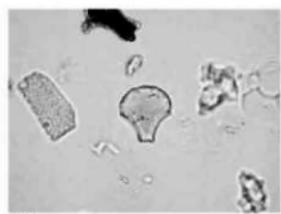


図2 第4地点における植物珪酸体分析結果



イネ  
第3地点 3



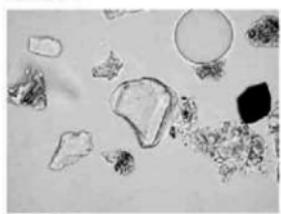
イネ  
第3地点 3



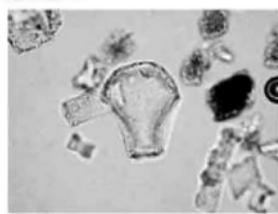
キビ族型  
第4地点 1



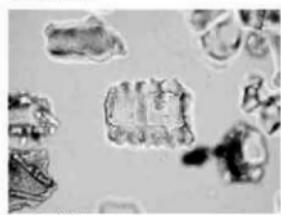
ヨシ属  
第3地点 19



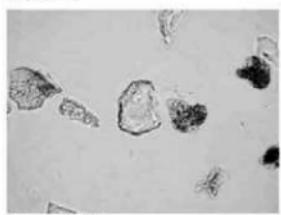
スキ属型  
第3地点 3



メダケ属型  
第3地点 13



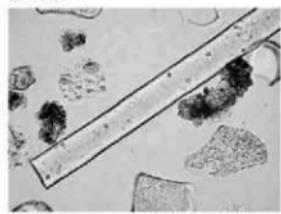
ネザサ属型  
第3地点 3



ミヤコザサ属型  
第3地点 13



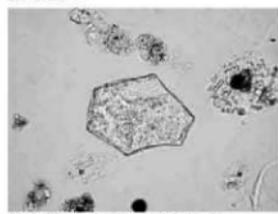
表皮毛起源  
第3地点 9



棒状珪酸体  
第3地点 3



クスノキ科  
第3地点 9



多角形板状(ブナ科コナラ属など)  
第3地点 21

— 50  $\mu$  m

#### 植物珪酸体（プランツ・オバール）の顕微鏡写真

## 花粉分析

### 1はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺跡内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### 2 試料

分析試料は、第3地点から採取された5点および第4地点から採取された1点の計6点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

### 4 結果

#### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉13、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉16、シダ植物胞子2形態の計32である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料について花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

##### 【樹木花粉】

モミ属、マツ属、松脂维管束亚属、コウヤマキ、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科、クルミ属、クマシデ属アサダ、シイ属マテバシイ属、コナラ属コナラ亚属、コナラ属アカガシ亚属、ニレ属ケヤキ、エノキ属ムクノキ、トチノキ、シナノキ属【樹木花粉と草本花粉を含むもの】  
クワ科イラクサ科

### 【草本花粉】

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ゾバ属、アザガ科ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、フレモウ属、アリノトウグサ属一ツサモ属、チドメグサ属科、セリ属科、シソ科、タンボボ属科、キク属科、ヨモギ属  
【シダ植物胞子】  
单条清胞子、三条清胞子

## (2) 花粉群集の特徴

### 1) 第3地点(図1)

下位の試料31では、花粉がほとんど検出されなかった。試料27から試料21にかけては、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科が高率に出現し、タンボボ属科、キク属科、セリ属科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ属などが低率に出現する。試料13から試料9にかけては、アザガ科ヒユ科、アブラナ科が出現しており、試料9ではゾバ属も認められた。

### 2) 第4地点(図2)

試料1では樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では、カヤツリグサ科やイネ科(イネ属型を含む)が優占し、ヨモギ属、タンボボ属科などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複雑管束亞属、コナラ属コナラ属などが低率に出現する。

## 5 花粉分析から推定される植生と環境

霧島御池テフラ(Kr-M, 約4,600年前)直上層では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾燥を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

その上位層(試料27~21)の堆積当時は、イネ科やヨモギ属を中心としてタンボボ属科やキク属科なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した開地の環境であったと考えられ、周辺地域にはナラ類(コナラ属コナラ属)やカシ類(コナラ属アカガシ属)などの森林が分布していたと推定される。

霧島高原スコリア(Kr-ThS, 10~13世紀)混層にかけてもおおむね同様の状況であったと考えられるが、この時期には部分的にゾバ属(ゾバ)の栽培が行われていたと考えられ、畑作雑草でもあるアザガ科ヒユ科なども見られたと推定される。

桜島3テフラ(Sz-3, 1471年)直下層の堆積当時は、カヤツリグサ科やイネ科などが多く生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周囲のやや乾燥したところには、ヨモギ属やタンボボ属科などが生育していたと考えられる。森林植生としては、周辺地域に二次林あるいは里山としてのマツ林が分布していたと推定される。

## 文献

- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。  
島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学研究館収蔵目録第5集。60p.  
中村純(1973)花粉分析。古今書院。p.82-110.  
中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究13,p.187-193.  
中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30.

表1 花粉分析結果

分類群 学名	和名	第3地点					第4地点
		9	13	21	27	31	1
ArboREAL pollen	樹木花粉						
<i>Abies</i>	モミ属						1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属				1		15
<i>Sciodopitys verticillata</i>	コウヤマキ						1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科						1
<i>Juglans</i>	クルミ属				1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				1		
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属		1				
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	6	6	16	5	1	6
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	2	1	4	1		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ			1			
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ				1		
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		2		1		
<i>Tilia</i>	シナノキ属		1	1	1		
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	4		2		1
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	57	90	71	27		82
<i>Oryza</i> type	イネ属型						2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	8	12	2		143
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1					
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒニ科	6	14				2
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1			
Cruciferae	アブラナ科	2	9		2		
<i>Sangnisorba</i>	ワレモコウ属			2			7
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属						1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科						2
Apioidae	セリ亞科	8	13	11	7		6
Labiate	シソ科				1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	31	26	10	15		22
Asteroidae	キク亜科	7	8	21	9		3
<i>Arenaria</i>	ヨモギ属	77	123	61	57	1	50
Fern spore	シダ植物胞子						
Monocolate type spore	單条溝胞子	4	6	5	2		3
Tritiate type spore	三条溝胞子	4	3	6	8		2
ArboREAL pollen	樹木花粉	9	11	24	9	1	24
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	4	0	2	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	194	292	188	120	1	320
Total pollen	花粉總數	204	307	212	131	2	345
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.2 ×10 <sup>3</sup>	2.9 ×10 <sup>3</sup>	2.3 ×10 <sup>3</sup>	1.0 ×10 <sup>3</sup>	1.6 ×10 <sup>3</sup>	1.3 ×10 <sup>4</sup>
Unknown pollen	未同定花粉	18	20	18	11	0	6
Fern spore	シダ植物胞子	8	9	11	10	0	5
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(++)	(++)	(++)	(++)	(++)	(++)

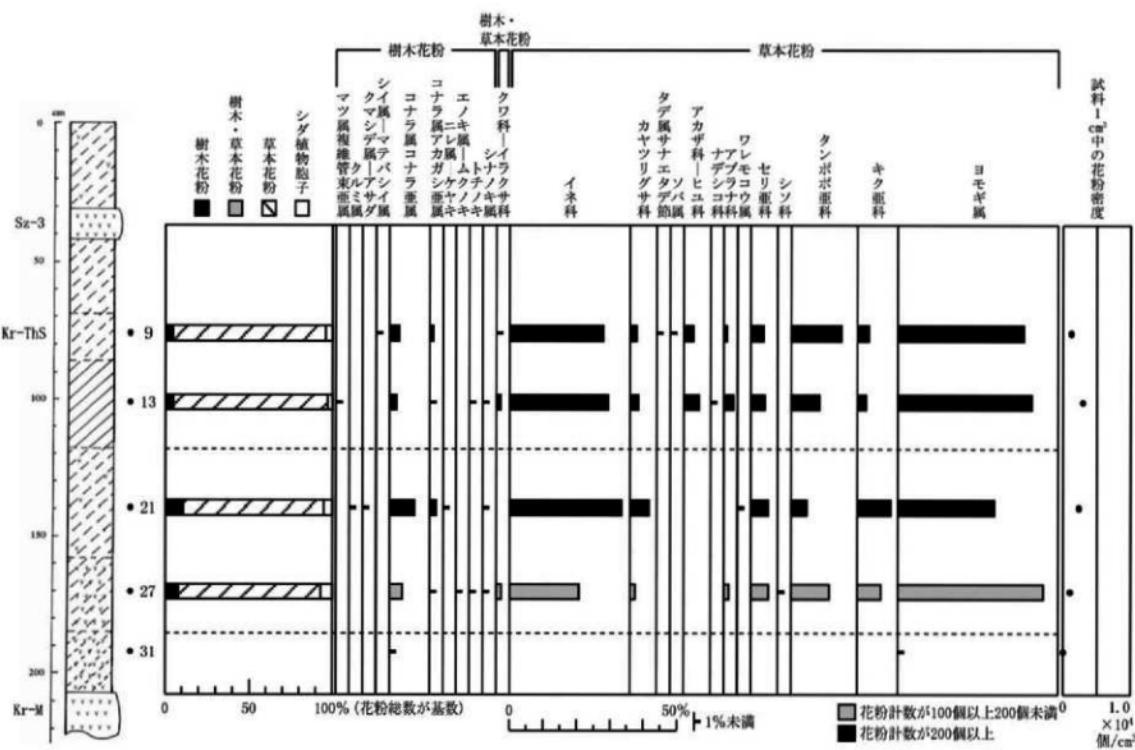


図1 第3地点における花粉ダイアグラム

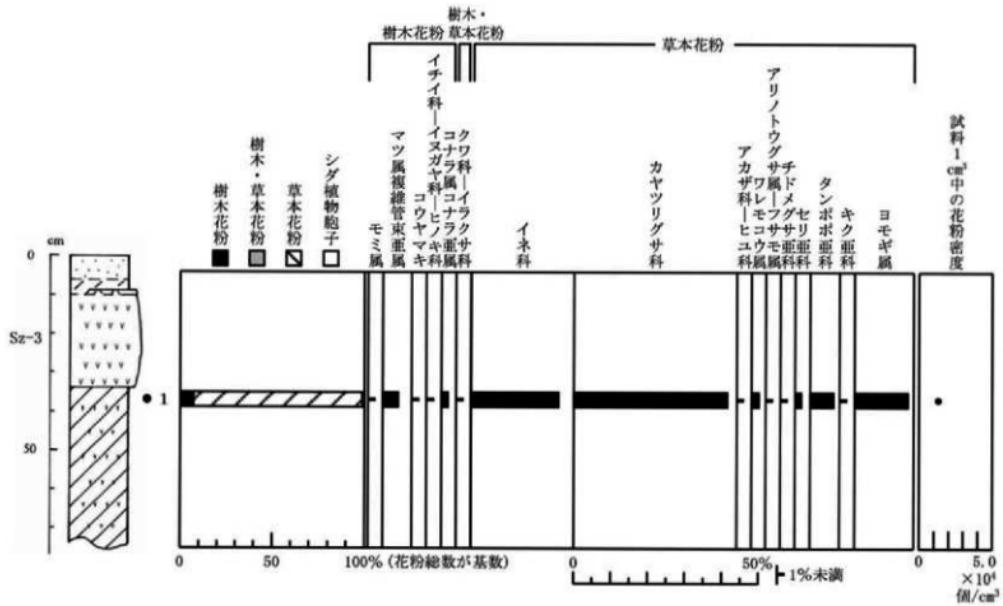
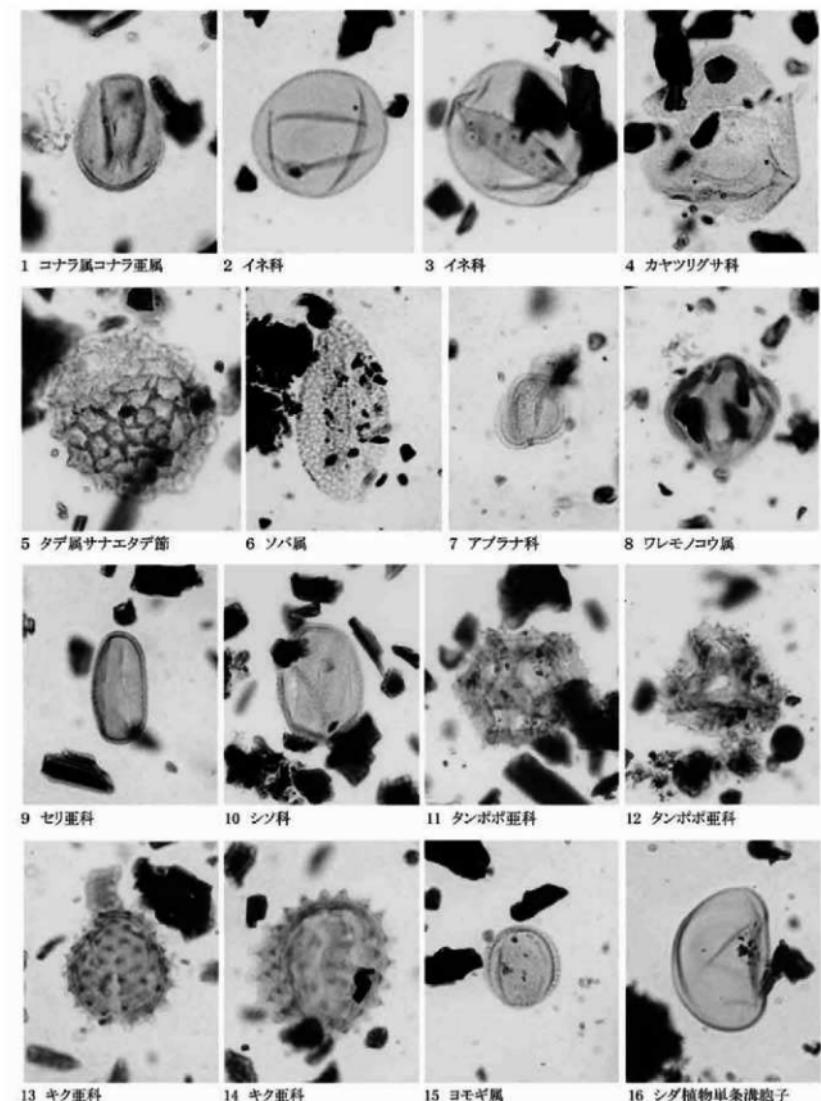


図2 第4地点における花粉ダイアグラム



筆無遺跡の花粉・胞子

— 10  $\mu$  m

## 第VI章　まとめ

筆無遺跡の3か年度にわたる発掘調査では、古墳時代を除く縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世の遺構・遺物が確認された。そしてこれらの遺構・遺物は、この地において連続として続いてきた人々の日々の営みを今に語りかけてくる。そこで最終章である本章では、確認された各時代の遺構・遺物をもとにそれぞれの時代の様相について若干の考察を加えまとめとしたい。

### 1 縄文時代

#### 【時期】

土器編年からA区は後期前葉・後期後葉～突帯文期、B区は早期後葉、後期前葉～中葉、晩期の時期に相当すると考えられる。

#### 【遺構と遺物】

本遺跡は遺物量に比べ遺構は土坑1基のみとその数が極めて少ない。これは、本遺跡に限らず県内の晩期遺跡における特徴であり、住居数は遺物量と比べるとその割合は格段に低い。ただ、これまで確認された後期から晩期の集落遺跡の平畑遺跡（宮崎市大字熊野字平畑）、本野原遺跡（宮崎市田野町字黒草甲）等を参考にすると、標高150m前後の台地上に立地する本遺跡は居住域が展開することが想定される。しかし本遺跡では居住域と認定できる遺構が見あたらずこの傾向と相反するが、九州では後期後葉～晩期中葉の集落は密集して切り合う集落が多数確認されていることから（水ノ江2002）、本遺跡の周辺の台地上に密集した集落が存在した可能性は十分にあり得る。また、時期不明のピットが多数検出されており、これら的一部が掘立柱建物跡として存在した可能性もある。

#### 【土器製作】

縄文土器の素地となる粘土に含まれる鉱物の中で、B区3類として分類した指宿式にのみ雲母が観察される（P55、第2表参照）。これは、指宿式とそれ以外あるいは指宿式以降の土器とでは、土器製作時の粘土採掘地点あるいは選択された混和材が他の土器と異なることが考えられる。また、晩期の黒色磨研土器の胎土には火山性ガラスが多量に観察された。これは、ミガキ調整を行う黒色磨研土器特有の土器成形方法に効的な粘土として、火山性ガラスを多量に含む粘土が選択された可能性もあると考えられる。

#### 【土器使用】

今回、全体像が復元できる資料のみ煤・焦げの付着状況を丹念に観察し図化を行った。資料は、縄文時代晩期及び突帯文期で、深鉢（A区11・22）と浅鉢（A区39・40、B区1・61）である。前述した煤・焦げの付着状況を小林正史氏の実験結果（小林1999）に照合し調理方法を想定すると、深鉢では晩期の11は「煮込み調理」、また、突帯文期の22は底部が残存せず不明瞭であるが、「煮る・ゆでる調理」の可能性がある。浅鉢については、小林論考では浅鉢の調理実験を行っていないため詳細は不明とする。ただ、1の外口縁部に煤が著しく付着しており、吹きこぼれの可能性がある。つまり、民族的事例から想定されていた「煎る調理」だけではなく、「煮炊き調理」の用途も可能性としてある。従来、器種分化は土器用途の分化と捉えられていたが、この資料は個々の土器に多種多様な用途があった可能性を示唆する資料と考えられる。器種分化が明確になる縄文時代後半以降の土器用途及び炉の検出が乏しい該期の住居において、今後とも実験や土器の観察を基にさらに検討を行う必要があろう。

### 【生業】

出土遺物から推察される生業について触れてみたい。食料の獲得具としては、狩猟具の石鏃、漁獵具の切目石錐があげられる。さらに、伐採加工具として磨製石斧、土掘具として打製石斧、食料加工工具として磨石・石皿からは食料粉碎作業が、スクレイパーからは食料解体作業が考えられる。

### 【食糧】

加工の対象となる食糧については、種々の対象物が想定されるが、大きな成果として土器圧痕から後期後半にコクゾウムシが確認された点があげられる。これにより、土器を製作した際、集落の周辺にイネが脱穀貯蔵されていた可能性がでてきた。つまり、水稻耕作が伝播している坂元A遺跡の突堤文期以前の後期後半には東南部九州にイネが伝播していた可能性がでてきたことになる。圧痕資料の他に、主体的ではないが石斧の出土や包含層中でイネのプラントオーパールも確認されている点から遺跡周辺において植物栽培が営まれた可能性は十分考えられ、さらに本遺跡の立地状況では、低地の水稻耕作とは異なる栽培方法が想定される。今後の周辺遺跡の調査と資料の増加に期待したい。(柳田)

## 2 弥生時代

いざれの遺構も検出面からの深さはあるが、本来の遺構の深さではなく、当時の生活面はさらに上であると考えられる。しかし、上層の黒色土での遺構の検出は至難であり、確認できるところまで掘り下げを行い遺構を検出した。弥生時代の遺構としては堅穴住居跡3軒と土坑1基のみであった。また、ピット群も存在していたと考えられるが、ピットから遺物が出土していないく、中近世のピット群と重複しているため確認することができず不明である。

確認できた住居跡のうちSA3は規模が大きく、ほかの2軒の住居の軸がSA3の方向を向き、SA1・2がSA3を中心に弧を描くように配置されていると考えられる。そのことから、SA3はこの集落の長たる存在の住居と考えられるが推測の域は出ない。しかも、住居跡からは出土遺物がほとんど無いこと、近接して住居跡が3軒確認できているが、3軒しか確認でていないことなどから一時的な住居であった可能性も考えられる。周辺の地形や包含層からの出土遺物が多いことなどから考えると、調査区の西側の更に上の台地上に本体ともいえる集落が存在しているのではないかと推測する。

SA1とSC1で出土した壺の破片を接合することができたことにより、同時期のものと断定することができ、SA1から出土した壺の底部から胴部とSA3から出土した口縁部から胴部が同一個体であると考えられることから、確認できたSA1からSA3の3軒の堅穴式住居跡は同時期のものと考えられる。SA3のすぐ横にSC1が存在していることからこの土坑は貯蔵穴ではないかと考えられる。

3軒の住居跡と土坑は廃絶時に祭祀行為として意図的に割った土器を分けて納めたもの(分納)と推測することができるのではないか。

出土した土器の口唇部の形状観察では、沈線が施されるものや断面がM字状・台形状・三角形状・T字状となるものが存在する。M字状は沈線を意識していると考えられるが、沈線のようにしっかりした凹みではなく凹み部分が緩やかである。1・5のT字状のものは肥後系というより、須玖II式の系統と考えられ、その他のものは形態などから中溝式、山ノ口式、松木齒式などの系統と考えられる。このことから時期について考えてみると、須玖II式=山ノ口式=中溝式という併行関係が設定されており、本遺跡から出土した土器の時期は弥生時代中期末から後期初頭を想定できる。

今回の調査で確認された竪穴住居跡3軒、土坑1基は、すべて同時期のものであると考えられ、出土遺物から弥生時代中期末から後期初頭と考えられる。また、出土遺物や地理的位置から鹿児島方面との交流が強かつたことがうかがえる貴重な資料となったのではないだろうか。(丹)

### 3 古代から中世

確認された数多くの遺構と遺物はその大半が古代末から中世初頭の時期幅に収まる。その事実から遺跡としての画期をこの時期に求めることができる。検出された方形プランの掘立柱建物跡や白磁・青磁を中心とした豊富な貿易陶磁の存在は、この土地を領した支配層の姿を垣間見せる。

#### (1) 遺構の配置とその性格

調査着手時点ではともに比較的平坦な地形であったA区・B区であるが、包含層の掘り下げが進むにつれてその地形は徐々に変容し現地表面からは想像しがたい複雑な地形を呈した。

A区の古代・中世の遺構検出面は、霧島御池軽石堆積層の上面で検出された開放起点付近の谷地形を反映していた(第P27、第10図参照)。桜島文明降下軽石の降下後に復旧された畠跡(歛状遺構)を検出した15世紀後半以降の地形ではさほど傾斜が強くなかったが、古代の土坑墓1基(SD1)が検出された第IIIa層上面では谷筋方向に向かい東西両方向から一定の傾斜を有する下り勾配となっていた。

検出された古代の遺構が調査区西端で検出された道状遺構(SG1)の一部と土坑墓1基に限られたのは、この地形的要因が少なからず影響しており生活空間として認識するにはその材料に乏しい。出土した遺物もその多くは調査区南西側に広がる一段高い平坦面からの流れ込みであり、生活空間の展開はこの平坦面と隣接する同レベルの畑地一帯が中心となると考えられる。

B区の地形は第IV章の序説で述べたとおり、次の3つの要素から構成されている(P41・42第1図参照)。

- ・調査区南側の台地丘陵から北北西方に派生する弱い尾根状の地形
- ・調査区東側から南側を取り巻く後背の台地丘陵
- ・調査区の北側の縁辺で確認された複雑に入り組んだ谷地形

これらの要素は筆無遺跡の土地利用に各時代を通じて影響を与えており、その一方で古代・中世の遺構配置を考えた場合、開放的な空間に一つのまとまりを付加する役割をも果たしている。古代・中世の掘立柱建物跡や土坑墓等の主要な遺構の多くは、弱い尾根状の地形より西側で集中して検出された。この事実は遺構が集中する空間の成立過程で、往時の人々が施設等を配置する区域を設定する際にこの弱い尾根状の地形を東の境界と設定する意識が働いたことを想起させる。

#### 1) 溝状遺構

古代の2号溝状遺構(SE2)と中世の4号溝状遺構(SE4)の配置には自然地形を空間の境界とした意識を感じ取ることができ、さらに「区画」として閉塞された空間を創出する配置の意識が顕著に表れている。南側台地丘陵から派生する弱い尾根状の地形に沿い北方向に延長するSE2は、尾根状地形が収束する付近で大きく西に走行軸を振り、溝幅も一段と広くなる。尾根状の地形に沿った範囲と付近とそこから離れた範囲で同一遺構の規模に相異が生じるのはその意識の表れと考えられる。また、SE4は北端部が消失、南端部は調査区外へと延長しその全体像は把握できない。しかし、遺構は尾根状の地形にほぼ平行した走行軸を保ち、その間に閉塞的な空間を創出している。今回の調査範囲では遺構の端部までを明らかにできず、その全体像の把握には至らなかったが、掘立柱建物跡を包括する空間を独立させ

ることを意図した配置がなされていた  
と考えるのが妥当であろう。

また、この遺構の中間点付近で検出  
された階段状の施設は出入口としての  
機能をもつものであると考えられ、第  
1図に第32図（P81）の平面図をもと  
にした想定復元図を示した。対称的な  
位置関係を保ち検出されたピットにつ  
いては、現段階では門の柱を据えるた  
めの柱穴跡を想定している。この2基  
以外に柱穴跡は検出されておらず、門跡とした場合、構造的には冠木門に類するものと考えられる。

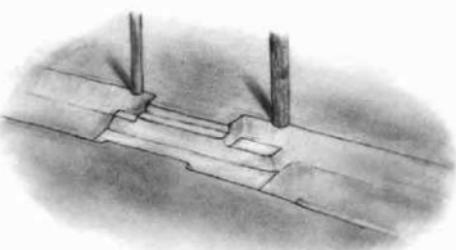
## 2) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は5棟検出した。その中で3号のみがやや離れた位置で検出されたが、すべて尾根状の地形の西側に位置しており、その範囲外では掘立柱建物跡は検出されていない。

古代の遺構と認定した方形プランの5号掘立柱建物跡（SB5）は、2号溝状遺構からの分岐が検出された付近に位置しL字状のピット列を伴っていた。四至の境界として、西と南をL字状のピット列、東を尾根状の地形とSE2、北をSE2と設定したと考えられる。

中世の掘立柱建物跡は4棟を検出したが、これらも同様に尾根状の地形とSB4に囲まれた空間の中に配置されている。このうち1号掘立柱建物跡（SB1）は古代のSB5と同様の方形プランを呈し、規模的にはSB5よりひと回り大きい。周囲に巡る「」状のピット列については底として認識できるものであるが、隅角でピットが検出できなかつことや南側に隣接して検出された4号掘立柱建物跡（SB4）との距離関係などから塀・柵等の附帯施設の可能性も指摘した。SB1～4は埋土観察の結果や柱穴内からの出土遺物の様相から併存した遺構と考えられる。このうちSB2とSB3はともに総柱構造の掘立柱建物跡で、SB1とほぼ方位を一にする主軸を保つ。とりわけSB2はその規模が3間×5間と検出した掘立柱建物跡の中で突出した規模を誇る。また、SB4についてはSB1との距離的な面からの配置に検討の余地があるが、SB1に直交する主軸方位を保つことから意図的配置と捉えたい。

これらの配置関係をもとに4棟の掘立柱建物跡からなるこの空間について考えた場合、SB1～3を主軸を揃え並列させたその配置からは、単に居住空間と解釈するだけでなく祭祀的性格の強い空間もしくはそういう性格の建物を併せもつ居住空間という可能性も視野に入れた捉え方が必要になる。建物の配置のみで祭祀的性格にまで短絡的に言及することはできないが、方形の掘立柱建物跡と総柱構造の掘立柱建物跡の組み合わせは、持仏堂的な性格をもつ建物とそれに伴う庫裏もしくは倉庫的な性格を付与された建物という見方もできることを指摘しておきたい。また、これら4棟の掘立柱建物跡に先行する遺構であるSB5についてもSB1と同様のプランを呈する建物であり共通する性格を想起させる。SB1～4とSB5の掘立柱建物跡の間には時間的な大きな隔たりが存在することは確実であるが、その土地がもつ空間としての性格はその間も普遍的に保たれ続けたと考えられる。



第1図 B区4号溝状遺構想定復元図（部分）

### 3) 周溝墓・周溝状遺構

周溝墓と周溝状遺構が検出された位置は、掘立柱建物跡や溝状遺構等が集中した範囲とは明らかに隔離されている。位置的には1号周溝墓(SM1)と2号周溝墓(SM2)は舌状に張り出した尾根状の地形の先端北側付近、3号周溝墓(SM3)が尾根状の地形の東側である。いずれも比較的平坦な面に掘り込まれていたが、地形的には谷地形の開放起点や斜面へと傾斜が変化する付近に相当する。

3基の遺構の周囲からは性格不明のピット等が確認された程度で生活の痕跡を示すような遺構は検出されておらず、遺物に関してもSM2が検出された付近で谷地形の開放起点を要因とする流れ込みによる弥生土器等の時期の異なる遺物が出土した程度である。3基の周溝墓の規模はP185の第1表「周溝墓測定値一覧」に示したが、周溝の外縁測定値を基にした形状比(長軸/短軸)を求めるとき、SM1の値が約1.18であるのに対し、SM2では約1.45、SM3では約1.39となる。この値が示すとおりSM1は円形に、SM2とSM3は長楕円形に近い平面形態でありそのプランに若干の相異が認められる。あわせてSM1とSM3の土壙内から出土した遺物をもとにした年代観ではSM1が9世紀末から10世紀後半、SM3が10世紀末から11世紀代の時期幅に収まると考えられ遺構間には時期差も認めることができる。SM2については遺構内物が確認されていないが平面形態からSM3とほぼ重なる時期と考えて差し支えないであろう。

今回、筆無遺跡では3基の周溝墓を確認したが、宮崎県内では第1表の一覧に示すとおり、これまでに古代・中世の周溝墓が5例報告されている。時期的には10世紀前後から15世紀代の幅をもつもののその確認例は少ない。地域的には清武町1、えびの市2、都城市2であり、県南西部の北諸県・西諸県地方での確認事例が多い。また、同一遺跡内で複数の遺構が確認された例はこれまでになく、調査範囲による偶然性もあるものの3基が同時に検出されたことは注目に値する。

なお周溝状遺構については、弥生時代の遺構・遺物が確認されていることから同時代の周溝状遺構の可能性もあったが、遺構内からの出土遺物は古代の須恵器甕の胴部片と土師器坏もしくは塊と考えられる時期不明の細片のみであったことから古代以降の遺構と考えられる。また、平面形態としては周溝墓の周溝とも同様であるが、中央の土壙が存在しない理由等を明らかにしえないことから遺構としては周溝状遺構と認定するに至った。

第1表 宮崎県内で確認された周溝墓一覧

遺跡名	所在地	検出数	時代	遺構の概要(副葬品等)
前原西遺跡	宮崎郡清武町大字木原字山内	1	14~15c	中央土坑 土師器の坏2枚・小皿4枚(系切底)、鐵貨、漆器
小路下遺跡	えびの市大字末永字上田代	1	鎌倉	中央土坑 土師器小皿4点
平原遺跡	えびの市大字東川北字平原	1	古代末	中央土坑 土師器皿・高台付塊 周溝 土師器甕・坏・皿・塊・黑色土器・布痕土器
池ノ友遺跡	都城市早水町4529番地2ほか	1	11c前半	中央土坑 土師器小皿1・刀子1・鉄製工具1・砥石1 周溝 土師器甕・坏・皿・塊・黑色土器・布痕土器
池島遺跡	都城市早水町3882番地ほか	1	中世	中央土坑 刀子茎1 周溝 土師器皿5

#### 4) 土坑墓

A区の1号土坑墓（SD1）は副葬されていた2個の完形の土師器塊から、およそその時期として9世紀後半から10世紀前半の遺構と想定している。A区では性格がはっきりしている遺構が少なく、生活空間を想定させる遺構は皆無に等しい。少なくとも古代においては生活空間からは切り離されていたことは確かであろう。副葬された遺物の出土状況についての考察についてはP92を参考にされたい。

B区の1号土坑墓（SD1）は、その検出位置が掘立柱建物跡等が集中して検出された空間の中に包括されている。遺構の主軸方位はほぼ座標北であるが、この土坑墓を含めてSB1をはじめとする4棟の掘立柱建物跡はおおむね南北方向に主軸をとる。なかでもSB1・SB4・SD1の3つの遺構はほぼ同一軸線上に並んでおり、遺構全体の配置における南北方向の基軸とみることができ、この土坑墓の被葬者が掘立柱建物跡を中心とする一連の遺構と密接な関係にあったことが想定され、遺構が単独で検出されたことや掘立柱建物跡を意識した意図的配置から屋敷墓と考えよいであろう。

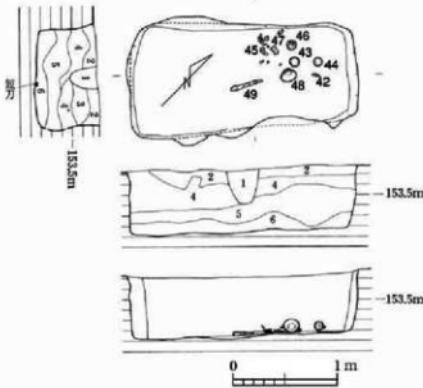
次にSD1の時期についてあるが、この検討に際しては都城市教育委員会が昭和62年に調査を行った郡元地区遺跡群の松原地区第IV遺跡

（同市郡元町所在）で検出された1基の土坑に注目したい。同遺跡からは中世から近世の掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など数多くの遺構が検出されているが、その中の4号土坑（SC4）は筆無遺跡の1号土坑墓と時期的に併行する土坑墓である。両遺構は規模もほぼ同じ土坑墓であるが、それ以上に副葬されていた遺物の内容構成が共通していることが特筆される。その内容は、土師器の小皿・白磁碗（大宰府陶磁器分類：白磁碗IV類）・刀子の3種類であるが、このうち土師器の小皿の底部にはヘラ切りと糸切りによる切り離し技法の混在が認められ、12世紀中頃と考えられているこの地域の土師器の糸切り技法の初現を考える上でも貴重な資料である。

これらの副葬品の構成内容にはその点数にこそ相違があるものの、そこには都城盆地の中世初頭の葬送における定型化された儀礼的行為の一形式を垣間見ることができる。松原地区第IV遺跡と筆無遺跡は直線距離にして約7.5kmと離れているが、島津荘が成立する前後の両地域の政治的動向はその成立過程を追う中で着目に値する。その両地域でこのような遺構が確認された事実は、一つの作法とでも言うべき儀礼的行為に対する考え方を共有する集団が存在したことの裏付けにもなると考えられる。

#### （2）遺物の様相

筆無遺跡から出土した古代・中世の遺物については、「炭」と書かれた墨書き器と陶磁器の中でも量



第2図 松原地区第IV遺跡の土坑（SC4）  
(都城市文化財調査報告書 第51集「郡元地区遺跡群」P17より転載)

的に突出した白磁の存在が注目される。これらの遺物が帰属する時期は、検出された多くの遺構の時期とも符合しており、遺跡としての隆盛期を概ねこれらの遺物の時期と重ね合わせて考えることができる。また、出土した遺物の中には点数的には少ないもののそれらの遺物に先行するものや時期的には中世末の遺物などがある。

### 1) 土師器

出土遺物の構成として単純に点数から考えると、土師器の割合は出土遺物全体の約58.1%と約6割を占めており他の遺物を優越する。出土した土師器全体における器種別の構成比較では壺が約43.6%と最も高く、次いで壺（円盤状高台壺、輪高台を有する高台付壺も含む）が約36.5%、皿が約12.1%の順で続き、これら3器種で全体の9割を超える。このうち壺類については底部片のみを確認した個体が多かつたものの量的には壺と大差ない点数が出土している。

甕に代表される比熱痕跡が明瞭に残る煮炊具の類は量的にも少なく全体の1割にも満たない。A区で器形全体を把握できる個体が数点出土しているものの、B区では1号周溝墓に副葬された甕と、2号溝状遺構内と包含層中から口縁部のみが出土したに過ぎない。この煮炊具が少ないという傾向は筆無遺跡の今回の調査範囲における特長であり、生活空間としては考えにくいところである。

#### 法量的観点から

出土した土師器の大半を占める皿・壺・壺の中から、口縁部から底部までの器形を把握できる個体が一定量確認できた皿・壺（墨書き器を含む）の法量について検討を加える。

なお、皿・壺のデータ抽出に際しては、残存率が概ね1/3以上の個体すべてを対象としたが、底径と口径の形状比（口径/底径）と第3図に示した口径と底径の2要素の相関図については、器形の全容が把握できた皿29個体、壺27個体から得た数値のみを取り上げ分析を行った。

#### 皿

計測値全体としては、底径：約5.5～9.2cm、口径：8.5～11.0cm、器高：1.1～2.7cmの数値幅が認められた。平均値は底径：約6.6cm、口径：約9.3cm、器高：1.6cmであり、平均値をもとに算出した形状比は約1.4である。抽出した29個体については底径：約6.5～7.5cm、口径：約8.5～9.5cmの間に集中する傾向が見られる。器高の平均値は約1.64cmであり、約7割の個体が平均値±0.2cmの範囲内に含まれている。底径と口径の形状比は1.19～1.38の幅があり、平均値は約1.32である。

相対的には法量的には大きなばらつきは認められないが、10cmを超えるやや大きめの口径を有する個体では形状比がやや小さくなる。

#### 壺

計測値全体としては、底径：約4.6～14.4cm、口径：11.3～15.8cm、器高：3.0～5.5cmの数値幅が認められた。平均値は底径：約6.7cm、口径：約13.4cm、器高：4.4cm、形状比は約1.8である。

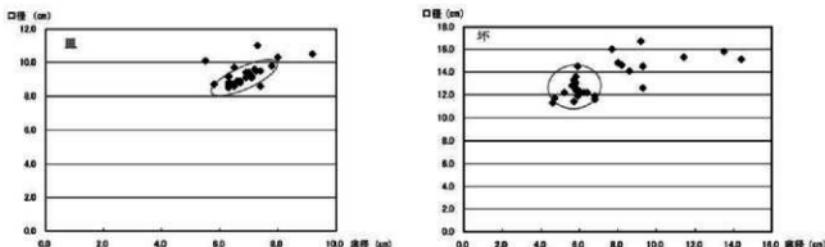
第B図に示した抽出個体による口径と底径の2要素の比較では、底径が6cm、口径が13cmを中心とした前後約1cmの範囲内に集中し、口径が14cmを超える個体については底径にややばらつきが見られる。また、時期的な同時性が指摘できる「堺」の墨書きが確認された壺については、約2.0～2.34の間の形状比が得られており、平均値との比較においては、体部がやや開き気味で口径に比して底径を小さく収める傾向が認められる。

### 技法的観点から

皿・壺の底部外面に残された回転台からの切り離し痕に着目すると、ヘラ切り離しによるものが大半を占める。数値的には糸切り離し底の底部を有する個体について皿：約5.9%、壺：約2.4%であり、ヘラ切り底と糸切り底の判別が可能であった皿・壺とを合わせた個体总数に占める割合で見るとヘラ切りによる切り離しは約3%に止まっている。中世日向におけるヘラ切り離しから糸切り離しへの技法的移行期については12世紀中頃を画期とする見方があるが、ヘラ切り離しから糸切り離しへの技法的転換は急なものではなく2つの技法が並存しながら緩やかな変化を遂げた。B区の1号土坑墓内にIV類の白磁碗とともに副葬されていた2枚の皿の底部に異なる技法が見出されたことは、ヘラ切りと糸切りの2つの技法が併存したことの時期的裏付けである。また、出土した陶器の中で大宰府分類の白磁碗IV・V類の出土量が他を優越する筆跡無遺跡においてヘラ切り離しによる皿や壺の占める割合が極めて高いことも糸切り離し技法の初現期を考える上で興味深い様相である。

糸切り離しの技法については、底径が大きめの壺に多く見られるというもう一つの傾向が見出せる。この傾向については、大径の底部が小径の底部に比して回転台との接地面が広く、ヘラ切り離しでは平滑面を容易に確保しがたいことがその要因としてあげられる。ヘラ切り離しに比べ、糸による水平方向の切り離しでは平滑な面を確保することが比較的容易であり、底部を再度平滑に調整する作業は軽減される。作業効率という観点からの取捨選択あれば、2つの技法が併存した時期において効率が高い技法へと淘汰されていく意識の流れは自然ではないだろうか。

最後にヘラ切り離しの底部に残る板目圧痕については、回転台から切り離したあとで板状の成形台の上で底部内面を押さえ気味にナデ調整し、底部を極力平滑に仕上げようとした際の所産であろう。糸切り離しの底部にはこの痕跡は認められず、面的な再調整をし個体は確認されていない。



第3図 皿・壺の法量分布図

### 黒色土器について

内黒と両黒の2つのタイプが確認されたが、このなかで両黒の皿（388・389）、壺（390）、高台付壺（396・397）は胎土そのものが黒色を呈している。これは酸化還元炎による焼成によるものであり、焼成後のミガキによる器表面の処理も極めて丁寧である。また、396と397の底部内面に見られるミガキは、その方向を縦横の直交する2方向のみに限定しておりその他の個体とはやや異なった処理過程が認められる。これらの個体は瓦器塊と並行もしくは平行に位置付けられる遺物と考えられる。

## 墨書き土器について

A区とB区から合わせて75点の墨書き土器が出土したが、このうちの29点では「山」と「水」を組み合わせて一つの文字として表記した「巣」と判読できる合わせ文字、もしくは「山」、「水」のいづれかの文字を判読することができた。この数は割合としては全体の約38.7%を占め、「本」もしくは「奉」と判読できる445を加えた文字と判別できる25点を合わせた数は54点となり全体の72%で文字が確認されている。しかし、墨書き土器全体としてはやはり「巣」の文字の存在が特筆される。

「巣」の文字については第III章で若干の考察を加えたが、筆跡に着目すると客観的に比較して少なくとも8人以上の手になる文字が認められる。この時代において文字を書くという行為は日常的なものではなく、行為としてはごく限られた人間のみが行っていたはずである。しかし、筆跡を詳細に検討すると始筆や終筆に書としての筆使いが見られなかったり、画数を意識した文字の折れや筆運が見出せなかつたりするものがある。これは「巣」を文字として認識したというよりも、むしろ一つの形としてそれを捉え「書く」ではなく「描く」という行為としてそれを表現した結果と判断できる。そこには文字を初めて書く子供がその字形を視覚的に認識し、筆順等を無視してその形を模倣する行為を通じるものを感じられ、おそらくは「巣」の合わせ文字を象形化された形として器に描いたのである。祭祀的な意味合いを強く感じさせるこの「巣」という特殊な文字。個々の遺物に遺されたこれらの文字は、この地に生きた当時の人々の祈りの心を象徴するものである。

## 2) 須恵器

須恵器については9世紀代を中心とした壺・壺などが出土している。これらの須恵器の中で点数としてはさほど多くないが壺と横瓶の存在に着目したい。

壺と器種認定した遺物は16点であるが、器形の全容が把握できた個体はA区で出土した117の短頭壺とB区で出土した受け口状の二重口縁を有する492の2点のみである。このほかの個体はいずれも口縁部や底部といった部位のみであるが、口縁部7点についてはすべて受け口状の二重口縁部である。口径の推定復元が可能であった494～499の6点については、約9.1～13.8cmまでの個体差があるが、平均口径で比較すると約9.6cm(494・495・496)と約13.7cm(497・498・499)の2つのグループに大別できる。これらの口縁部は開き角に若干の差があるが、「く」の字の屈曲はいずれも明瞭である。

横瓶の破片は4号溝状造構の埋土と包含層中から出土したが、古墳時代の胸部両端を平滑に仕上げる樽型の横瓶とは異なり、側面から見た形が薺玉状を呈するいわゆる俵型のタイプである。両個体とも、外面に格子目タタキ痕、内面に同心円當て具痕の調整痕が認められ、胸部両端の閉じ方も共通していることから同時期の遺物と考えられる。

須恵器としては壺・横瓶のほかにも大小の甕が数多く出土しており、外器面に平行タタキ痕、内面に同心円當て具痕と平行當て具痕が見られるタイプが大半を占める。特に内面の當て具については胸部中位付近を境界として部位による使い分けが明瞭である。これらの甕は年代観としては9世紀前半から10世紀前半の時代幅に位置付けられるが、壺・横瓶については9世紀後半が下限と考えられる。

## 3) 陶磁器類

出土した陶磁器類は大宰府分類における白磁碗IV・V類に代表される12世紀代の遺物を中心に構成されるが、そのほかにも古い様相を呈す一群も出土しており、時期的な観点から遺物を見ていくと9世紀代と12世紀代に2つの画期が存在すると考えられる。

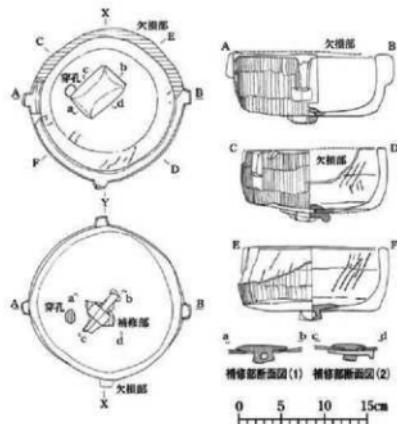
9世紀代の遺物に比定される古い様相を呈す一群としては緑釉陶器・灰釉陶器・白磁碗・越州窯系青磁があげられる。緑釉陶器は器種としては壺・皿が確認された。底部外面に圓線状の沈線が施されており、蛇の目高台を意識したものと考えられる。輪高台を有する個体は確認されていない。時期的には9世紀中頃を上限とし、大半が洛西タイプに属する個体である。灰釉陶器は口縁部と底部の2点が出土した。胎土中に黒斑が特徴的に認められ猿投窯の製品と考えられる。時期的には猿投窯の黒径90号窯段階に比定でき9世紀後半を下限とする。白磁として9世紀代に帰属するものは白磁碗I類の底部片が1点のみである。しかし、出土した白磁片の中には乳白色の釉調を呈する体部細片があり、I類に属する個体がそのほかにも存在する可能性があるものの確定要素に欠ける。越州窯系青磁は碗I-1a類のみが出土している。同類の他のタイプやII類の混在がなくI-1a類のみに限定されている。層位的な観点から見ると、緑釉陶器・灰釉陶器・白磁碗I類については遺物包含層であるIIIb層中の下位からの出土に限定されているが、越州窯系青磁については同層中の中位からも出土している。

12世紀代を中心とする遺物は白磁碗IV・V類と皿II・VI類に代表され出土点数が量的にも優越している。量的に一定の割合を占める碗IV類は、光が透過するほど薄手に仕上げた器壁に釉を丁寧に施したものから、器壁が厚く釉が発泡した粗製の物まで製品としての個体差がかなり大きい。この傾向はV類にも共通したことが言える。そのほかにもIV・V類に時期的に先行するXI類が2号溝状遺構の埋土中の上位や包含層中から出土している。これらの大量の白磁の存在は、越州窯系青磁に変わり同安窯系や龍泉系の青磁が隆盛を極め白磁を優越していく前段階に当たり、中世初頭に展開した遺跡の姿を反映したものであると考えることができるであろう。

#### 4) 石製品～石鍋およびその加工品について～

滑石製品としての石鍋は縦耳の把手を有する個体と鍔を有する個体の2タイプを確認した。しかし、今回の調査で確認した滑石製品の大半は石鍋転用と考えられる様々な二次加工製品である。第74図に示したとおり様々な形状の製品があり、用途不明の個体も多いが、671～673については、八児遺跡から出土した底部を補修した石鍋にその用途について手掛かりを求めることができる。

八児遺跡から出土した石鍋は、被熱による亀裂等が生じたか、もしくは底部を局部的に損傷し補修が必要になったと考えられる。補修には削り出したつまみ状の突出部に穿孔を施したのスタンプ状の滑石板（約5.8cm×約4.0cm）を使用している。底部内面からその突出部を底部外面に抜き差し、穿孔部に鉄製のピンを差しこみかじめている。熱を受けることを前提とした補修方法であり、滑石と鉄の熱膨張を利用したものである。筆無遺跡から出土した類似する二次加工品もこのような用途を目的として加工された製品である可能性が指摘できる。



第4図 八児遺跡の石鍋 (S=1/6)

実際にはこれだけの補修では煮炊きの際にその間隙から水分が漏れるが、煮炊きを繰り返すことで付着した調理具材等の有機物が被熱し徐々に炭化して補修材との隙間を埋めていくことにより再度使用が可能になったと考えられる。現在でも陶器製の湯呑み茶碗を初めて使う際に水漏れを防ぐ目的で、米の研ぎ汁を一晩入れたままにしておくなど昔からの知恵が生きている。当時、この補修法が一般化したものであったかは不明であるが、昨今同じような形状をしたスタンプ状の滑石製品の存在が注目されている。これらの補修部品が製品として流通していたか、またはその方法のみが伝播し、消費地において廃棄する石鍋片を再加工したものであるかは現段階では言及する資料に乏しく、その解明には類例の蓄積と今後の検討を待ちたい。

#### 4 近世

検出された遺構の中では1～4号土坑の存在が特筆される。2基ずつが隣接して配置されていることから、遺構を単体として捉えるのではなく、2基で1セットとして使用していたと考えるべきであろう。これら4基の土坑は、陶器甕がその内部から出土したことから貯蔵を目的として設置されたと考えられるが、1・3号の床面で検出した4個の石を根拠として個々の使用目的の相異も想定できる。

4個の石は方形の土坑床面の壁側に配置されており、平滑な面を上にして床面よりもレベル的に高くなるように据えられていた。おそらくは柱の礎石もしくは板等をその上に置くための基礎と考えられる。ただ、板状の物を置いて台を設置したと仮定すると、長辺の石と石の間隔がやや広すぎる感がある。上からの加重に対する負荷に耐えるためには中間付近にも石等を据える必要があることから、柱を据えるための石とするのが妥当であり、仮に板状の設置物を置いたとすれば負荷がさほど掛からない軽量の物を置いたと見るべきであろう。いずれにせよ4個の石の配置には床面から浮かせるという意図が明確に存在する。短絡的には小物類を整理するための棚等の設置物を想定するが、もう一つの側面として素掘りの土坑であるが故に避けられない湿気に対応する意図をもって棚等が設置されたことも想定され、貯蔵物の特性に応じて使い分けがなされていたと考えてよいであろう。これらの土坑と掘立柱建物跡・溝状遺構等からなる居住空間が、この地域の18世紀中頃の住空間の構成要素となるものであるかはさらなる検討を要する。しかし、これらの遺構をセット関係で確認できたことは、今後の検討材料として一つの好資料を提示することができたと考える。

なお、この筆無遺跡周辺は地元では「シタンヤシキ」と呼ばれ、おそらくは「下ノ屋敷」をその語源とすると考えられる。今回の調査で確認された近世の屋敷跡がその呼称と直結する遺構である確証はないが、屋敷地として認識されていた場所であったことは確実であろう。

以上、筆無遺跡の調査で確認できた遺構・遺物について時代ごとに考察を試みまとめとしたが、すべての遺構・遺物についての詳細な検討を加えることはできなかった。しかしながら、鹿児島県曾於市から都城市へと流れ下る大淀川中流域に展開した筆無遺跡は縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世の各時代における人々の営みを垣間見てくれた。なかでも古代末から中世初頭の遺構・遺物は、島津荘成立前後にこの地に生きた人々の姿を映し出すとともに、都城盆地における該期の地域的様相を考える上で大きな手掛かりとなるであろう。今後の周辺地域の調査成果の蓄積により、点として存在する遺跡や史跡等の関係がより明らかなものとなることを期待するものである。

## 【参考文献】

### 縄文

- 安富和男・梅谷歎二 1983 「原色図鑑衛生害虫と衣食住の害虫」全国農村教育協会
- 可見通宏 2005 「縄文土器の考古学研究」考古学研究
- 金丸武司 2005 「九州における縄文の大土木工事」『南九州縄文通信』No.16
- 柴畠光博 2006 「東南部九州における縄文から弥生への土器変遷」『大河』第8号
- 柴畠光博 1999 「平塚遺跡の再検討（1）—縄文後・晩期土器の編年—」『宮崎縄文研究会第9回例会資料』
- 小林正史 1999 「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」『食の復元—遺跡・遺物から何を読みとるか—帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集2』岩田書院
- 佐原 真 1979 「土器の用途と製作」『日本考古学に学ぶ』2 有斐閣
- 堂込秀人 1997 「南九州縄文晚期土器の再検討—佐式と黒川式の繩分—」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古会
- 林 匠夫・森本 桂・木元新作 1984 「原色日本甲虫図鑑（IV）: 保育社
- 藤尾慎一郎 1993 「南九州の実帝文土器」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古会
- 藤木 啓 2005 「宮崎県域における縄文時代の石斧と石材」『stonesources』No.5 石器原産地研究会
- 藤木 啓 2003 「宮崎県域の鍬具の変遷の分布」『考古学研究室創設30周年記念論文集 先史学・考古学論究IV』龍田考古会前追亮一 2002 「南の鹿渕洞文土器」「犬養徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学」犬養徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 前追亮一・水ノ江和同 2001 「九州地方南部における縄文時代集落の諸様相」「列島における縄文時代集落の諸問題」
- 水ノ江和同 1997 「北部九州の縄文後・晩期土器 ～三万式から劍突帯文土器の直前まで～」『縄文時代』第8号
- 水ノ江和同 2001 「九州北部における縄文時代集落の様相」「列島における縄文時代集落の諸様相」
- 水ノ江和同 2002 「九州の縄文集落」「犬養徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学」犬養徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 水ノ江和同 2005 「九州の縄文後期集落」「西日本縄文文化の特徴」
- 山崎純男 2005 「土器庄重からみた食と生業」「土器研究の新視点～弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～」土器の技術・調理研究会
- 山崎純男 2007 「九州縄文時代生業活動の展開」「九州における縄文時代早期前葉の土器相」第17回九州縄文研究会福岡大会
- 高城町教育委員会 2004 「棚井地区遺跡群」「高城町文化財調査報告書」第14集
- 都城市教育委員会 1994 「馬鹿遺跡」「都城市文化財調査報告書」第14集
- 都城市教育委員会 2006 「坂元A遺跡 坂元B遺跡」「都城市文化財調査報告書」第71集
- 田野町教育委員会 2006 「本野原遺跡3」「宮崎市文化財調査報告書（田野町文化財調査報告書）」第53集

### 弥生

- 石川悦雄 1979 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描（Mk. II）」「宮崎考古」第9号 宮崎考古学会
- 中村直子 1992 「南部九州における弥生土器の編年研究に関する問題」「南九州地域における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究」鹿児島大学法学院
- 中国 啓 1993 「宮式縄と南部九州の弥生時代中期土器」「鹿児島考古」27 鹿児島考古学会
- 新富町教育委員会 1983 「対馬遺跡・薩摩遺跡」「新富町文化財調査報告書」2集
- 鹿児島県教育委員会 1985 「玉子遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(34)
- 鹿児島県教育委員会 1980 「山ノ口遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」第7集

### 古代・中世

- 中世墓資料集成研究会 2004 「中世墓資料集成 一九州・沖縄編（2）」
- 日本中世土器研究会 1997 「中世土器の基礎研究Ⅲ」
- 都城市教育委員会 2000 「池ノ友遺跡（第1次調査）」「都城市文化財調査報告書」第49集
- 都城市教育委員会 2000 「坂元A地区遺跡群」「都城市文化財調査報告書」第51集
- 都城市教育委員会 2004 「馬鹿遺跡」「都城市文化財調査報告書」第62集
- 宮崎県教育委員会 1995 「伊都遺跡・八呂遺跡」「県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県教育委員会 2003 「八幡遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第70集
- 宮崎県教育委員会 2004 「池島遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第84集

### 近世

- 鹿児島市教育委員会 2001 「大龍遺跡B地点」「鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書」(34)
- 都城市史編さん委員会 2005 「都城市史」通史編 中世・近世
- 都城市史編さん委員会 2003 「都城市史」史料編 近世3
- 宮崎県教育委員会 1995 「八幡遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第70集

# 図 版



筆無遺跡遠景（都城市安久方面を望む）

图版 2



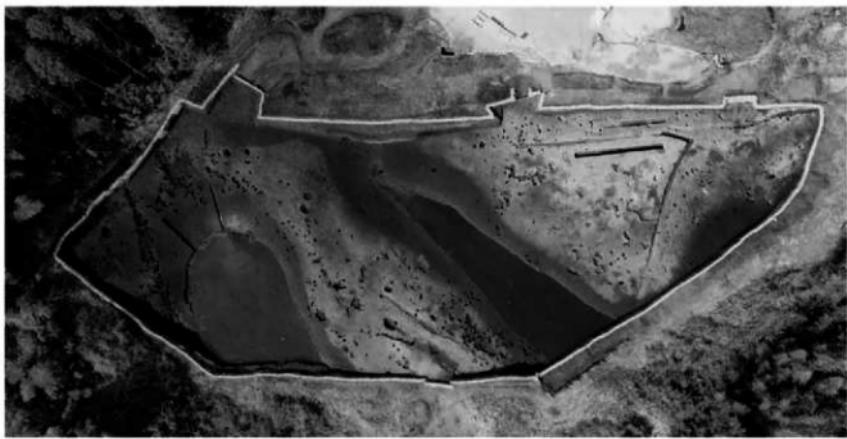
A区

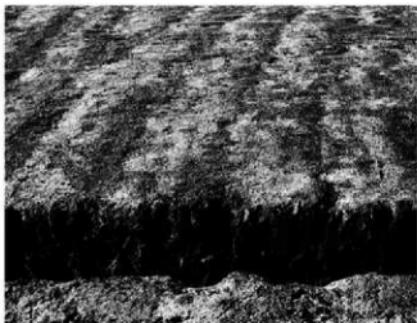


B区 (B地点)



B区 (C地点)





A区

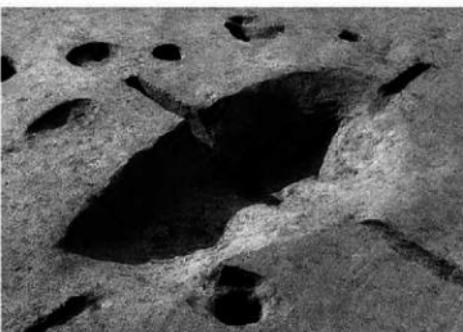
上段左：1号道状遺構完掘状況（古代）  
上段右：1号土坑墓（古代）  
下段左：歛状遺構断面（中世）



B区 遺構検出状況（C地点西半分丘陵部、右上の谷を挟んでA区）



B区 1号土坑遺物出土状況（縄文）

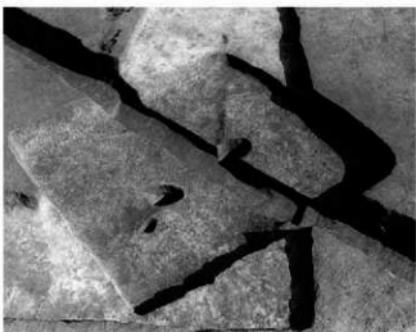


B区 3号土坑完掘状況（縄文）



B区 1～3号竖穴住居跡分布状況（弥生、D1地点北半分）

図版 6



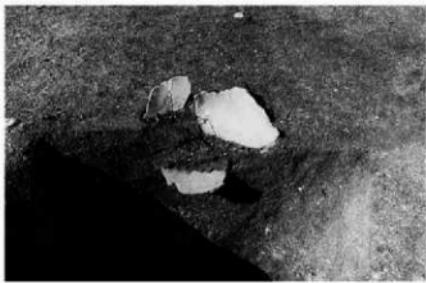
B区 1号・2号竪穴住居跡完掘状況（弥生、D1地点北半分、左：1号、右：2号）



B区 3号竪穴住居跡遺物出土状況（弥生、D1地点北半分）



B区 遺物出土状況（SA1、遺物番号134）



B区 1号土坑遺物出土状況（弥生、遺物番号135）



B区  
ピット集中区  
(古代・中世、B地点)



B区  
2号溝状遺構  
(古代、D1地点、部分)



B区  
4号溝状遺構  
(中世、B地点、部分)

図版8



B区

2号溝状遺構（古代）

左：完掘状況（B地点）

右：埋土堆積状況（D1地点）



B区 4号溝状遺構

出入口想定部分（中世、B地点）



B区 3号溝状遺構（手前）と1号道状遺構（奥）  
(古代、D1地点、部分)



B区 2号道状遺構  
(中世、D2地点)



B区 1号周溝墓完掘状況（古代・C地点）



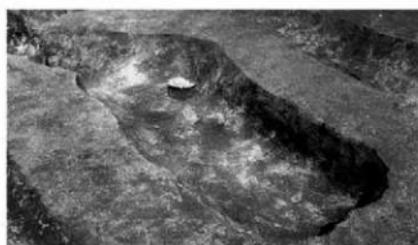
B区 2号周溝墓完掘状況（古代・B地点）



B区 3号周溝墓完掘状況（古代・B地点）



B区 1号周溝墓出土遺物（土師器壺）



B区 3号周溝墓の中央土壠内遺物出土状況  
上段：完掘状況 下段：出土状況近影



B区 1号周溝状造構（古代、C地点）  
上段：検出状況 下段：完掘状況



B区 1号土坑墓  
(中世、D 1地点)  
左：完掘状況  
下：副葬品出土状況



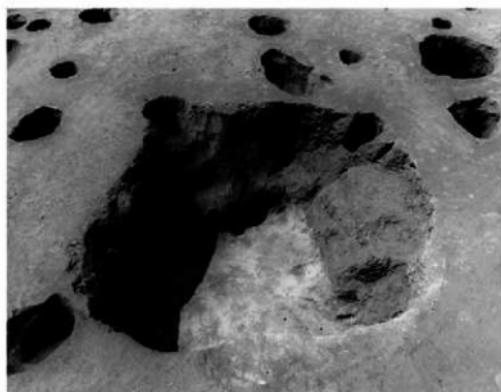
B区 湿水の状況（左写真の水際付近で流れ込みによる縄文土器が集中して出土、D 2地点）



B区 土層堆積状況（D 2地点、上段右の写真の中央土層観察ベルト）



B区 1号·2号溝状遺構埋土堆積狀況（近世、D1地点、左：1号、右：2号）



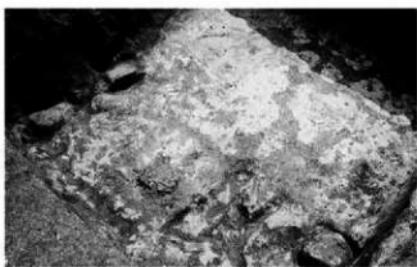
B区  
1号土坑完掘状况  
(近世、D1地点)



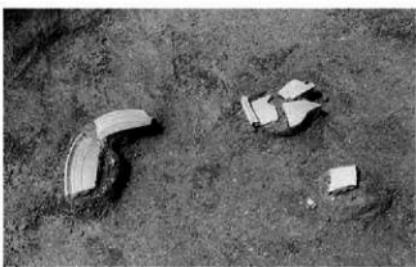
B区  
2号土坑完掘状况  
(近世、D1地点)



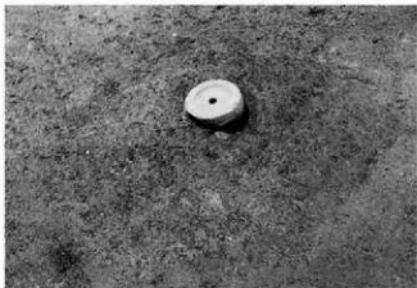
B区 3号・4号土坑完掘状況（近世、D1地点、手前：4号、奥：3号）



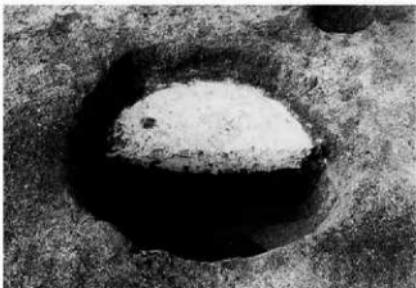
B区 3号土坑床面検出状況（近世、D1地点）



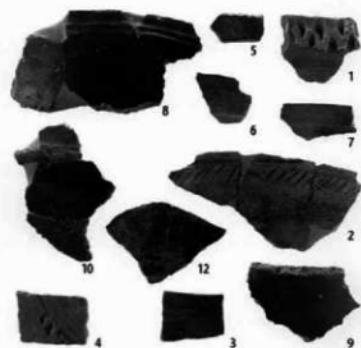
B区 3号土坑床面検出状況（近世、D1地点）



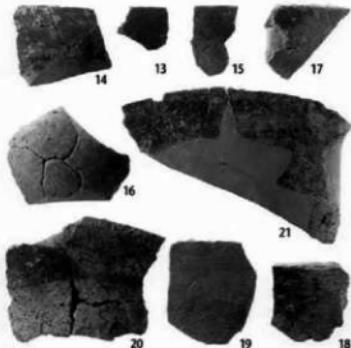
B区 5号土坑 茶臼出土状況（近世、D1地点）



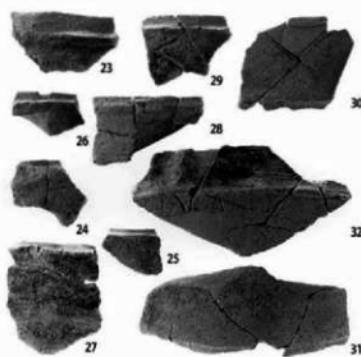
B区 8号土坑 白色粘土充填状況（近世、D1地点）



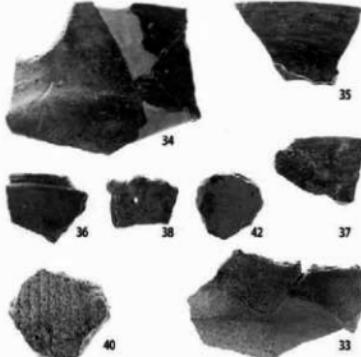
A区 縄文土器 1類～4類



A区 縄文土器 5類



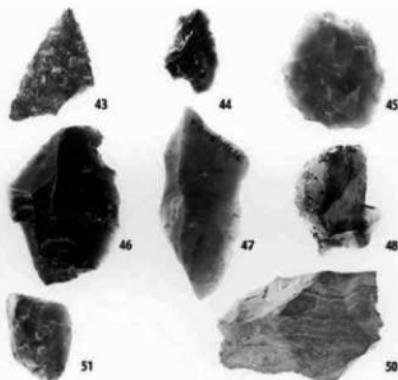
A区 縄文土器 6類



A区 縄文土器 7類～9類

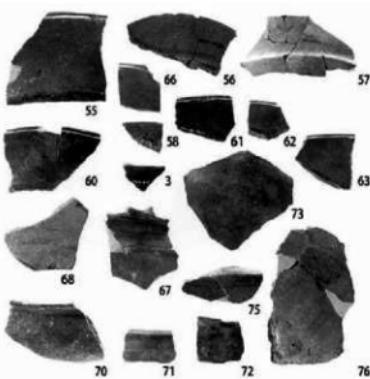
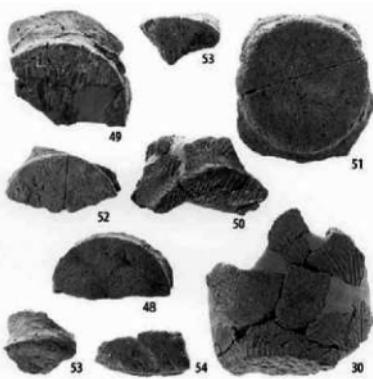
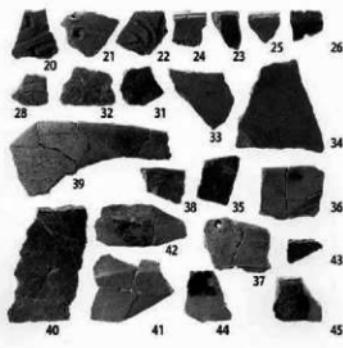
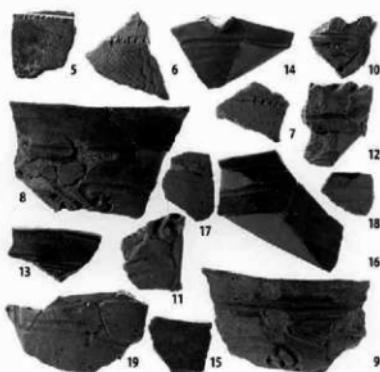
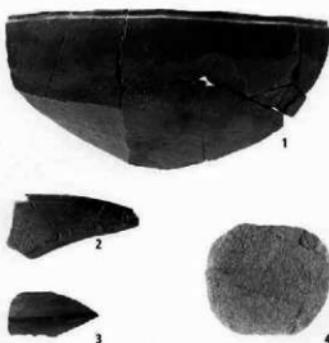
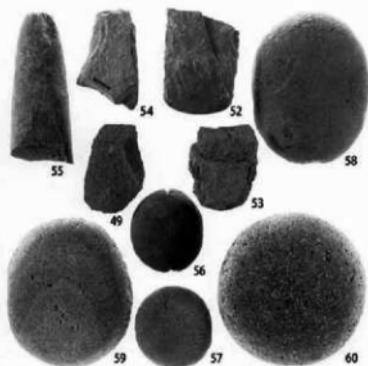


A区 縄文土器 4類・6類・10類



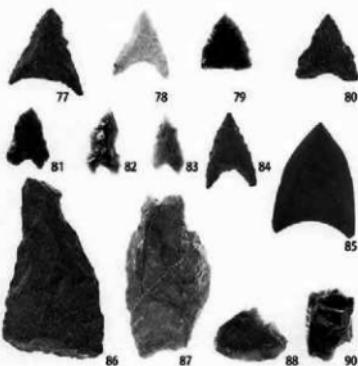
A区 石鏃・スクレイパー・剥片

図版14

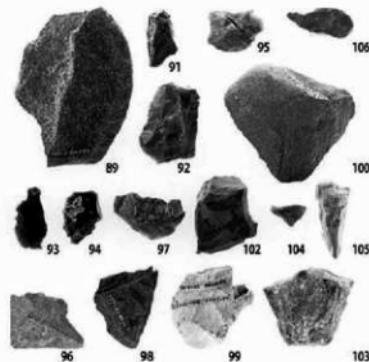




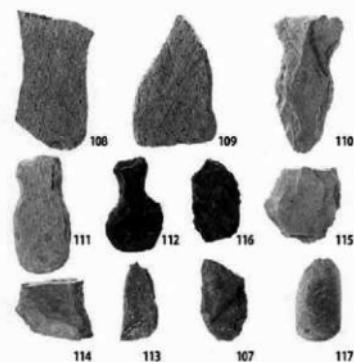
B区 繩文土器 5類・9類・12類



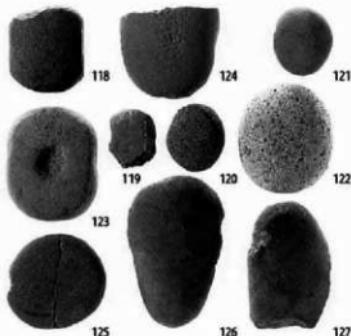
B区 石鎌・石匙・スクレイバー・楔形石器



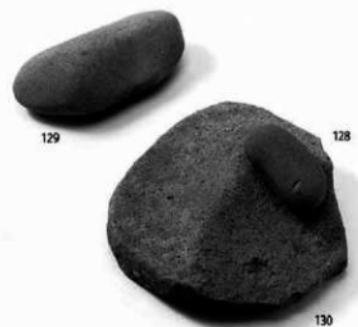
B区 スクレイバー・剥片・石核



B区 打製石斧・磨製石斧



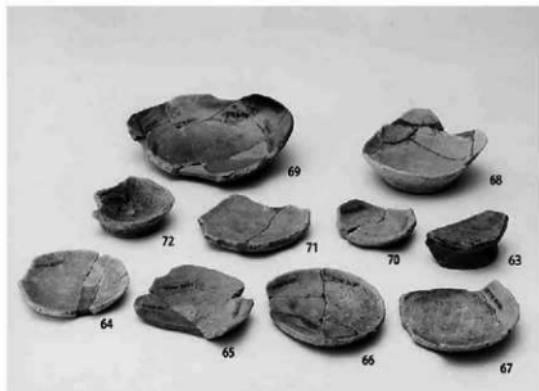
B区 敲石・磨石



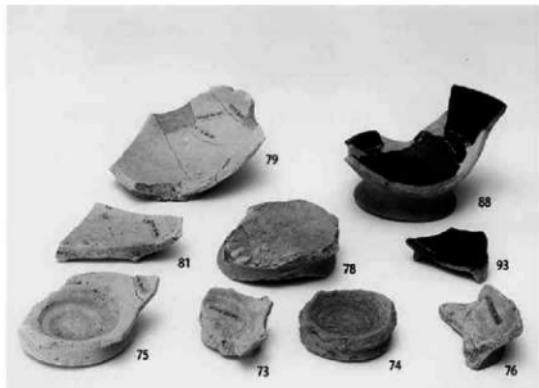
B区 磨石・石皿



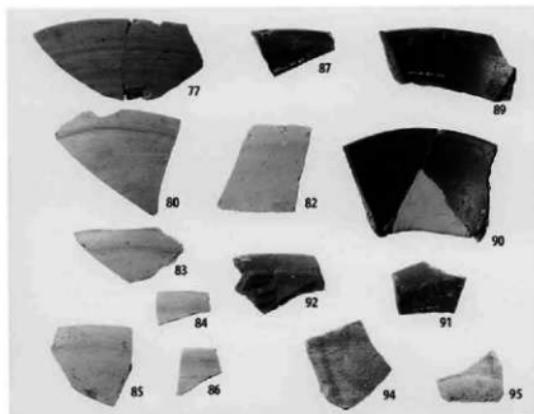
A区  
1号土坑墓出土遺物  
(壺)



A区  
1号道状遺構出土遺物(63、高台付塊)  
包含層出土遺物1(皿・壺)



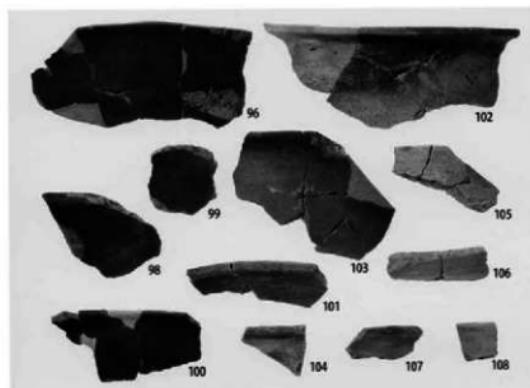
A区  
包含層出土遺物2  
(高台付塊・黒色土器)



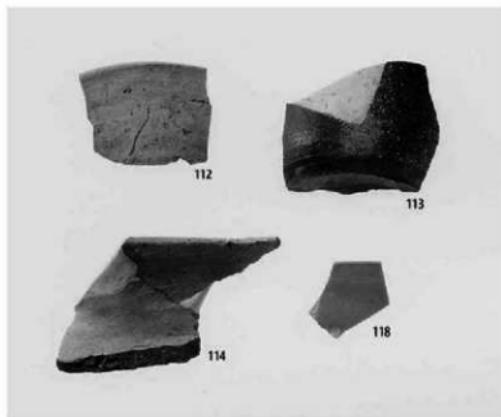
A区  
包含層出土遺物3  
(高台付焼・黒色土器・墨書き器)



A区  
包含層出土遺物4  
(土師器:鉢・壺)



A区  
包含層出土遺物5  
(土師器:鉢・壺)



A区  
包含層出土遺物6  
(須恵器・越州窯系青磁)



A区 包含層出土遺物7 (須恵器、高台付碗・坏・壺)



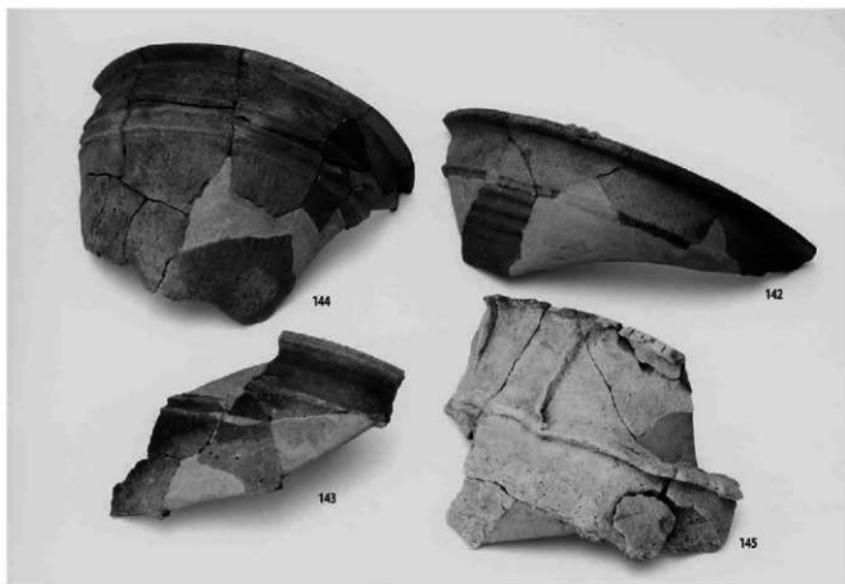
A区 包含層出土遺物8 (刀子)



B区 1号竖穴住居跡出土遺物



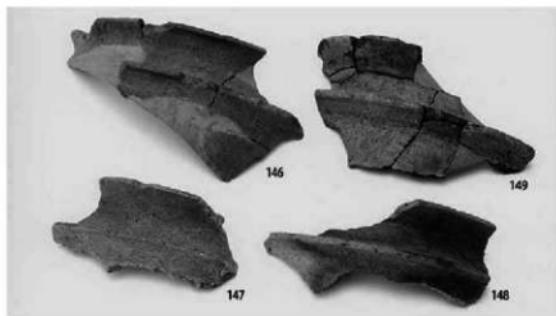
B区 2号竖穴住居跡出土遺物



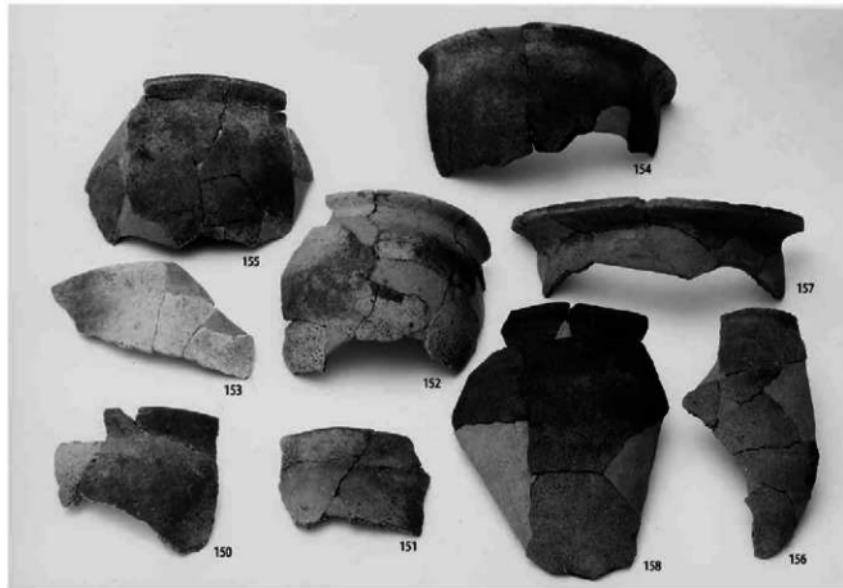
B区 包含層出土遺物1 (弥生土器：壺)



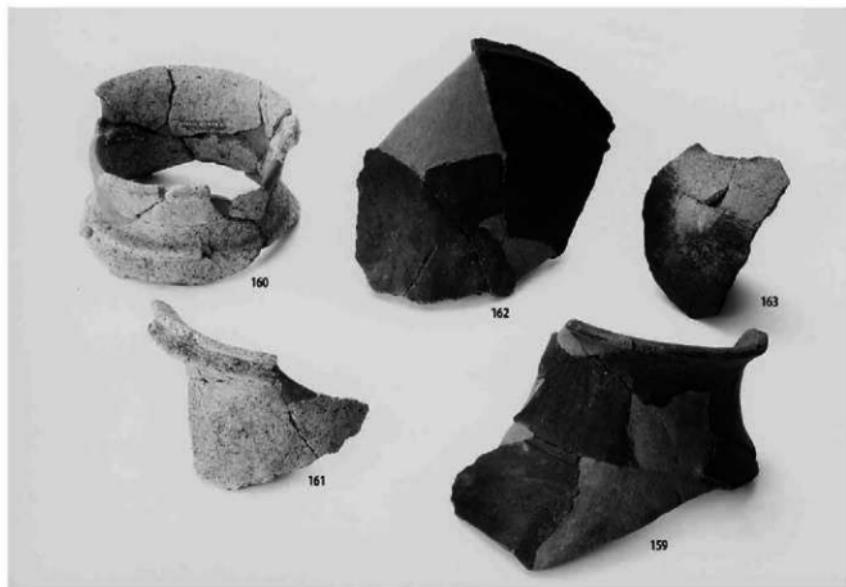
B区 包含層出土遺物2  
(弥生土器：壺)



B区 包含層出土遺物3  
(弥生土器：壺)



B区 包含層出土遺物4 (弥生土器：壺)



B区 包含层出土遗物5（弥生土器：壺）



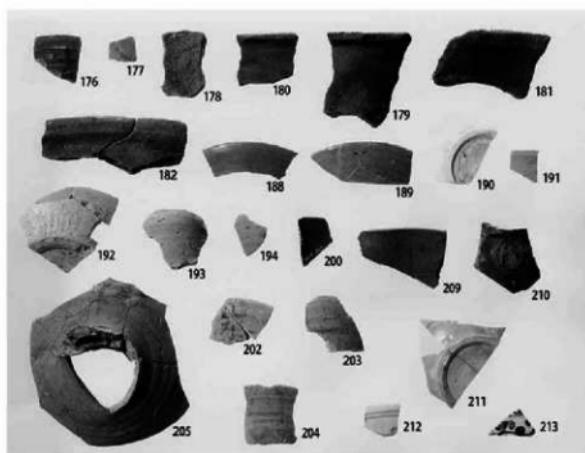
B区 包含层出土遗物6（弥生土器：底部）



日区 2号清状造構出土遺物



日区 4号清状造構出土遺物



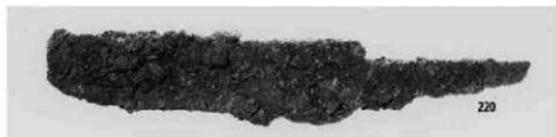
日区  
2・4号清状造構出土遺物



B区 2号溝状構出土遺物（須恵器：壺）



B区 周溝墓出土遺物（高台付塊・壺・鉢）



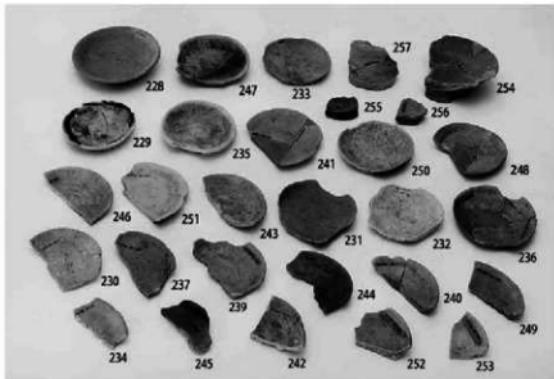
B区 1号土坑墓副葬品  
(刀子：布付着)



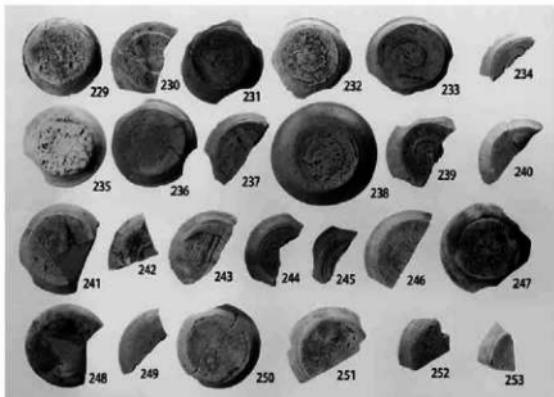
B区 1号土坑墓副葬品  
(刀子)



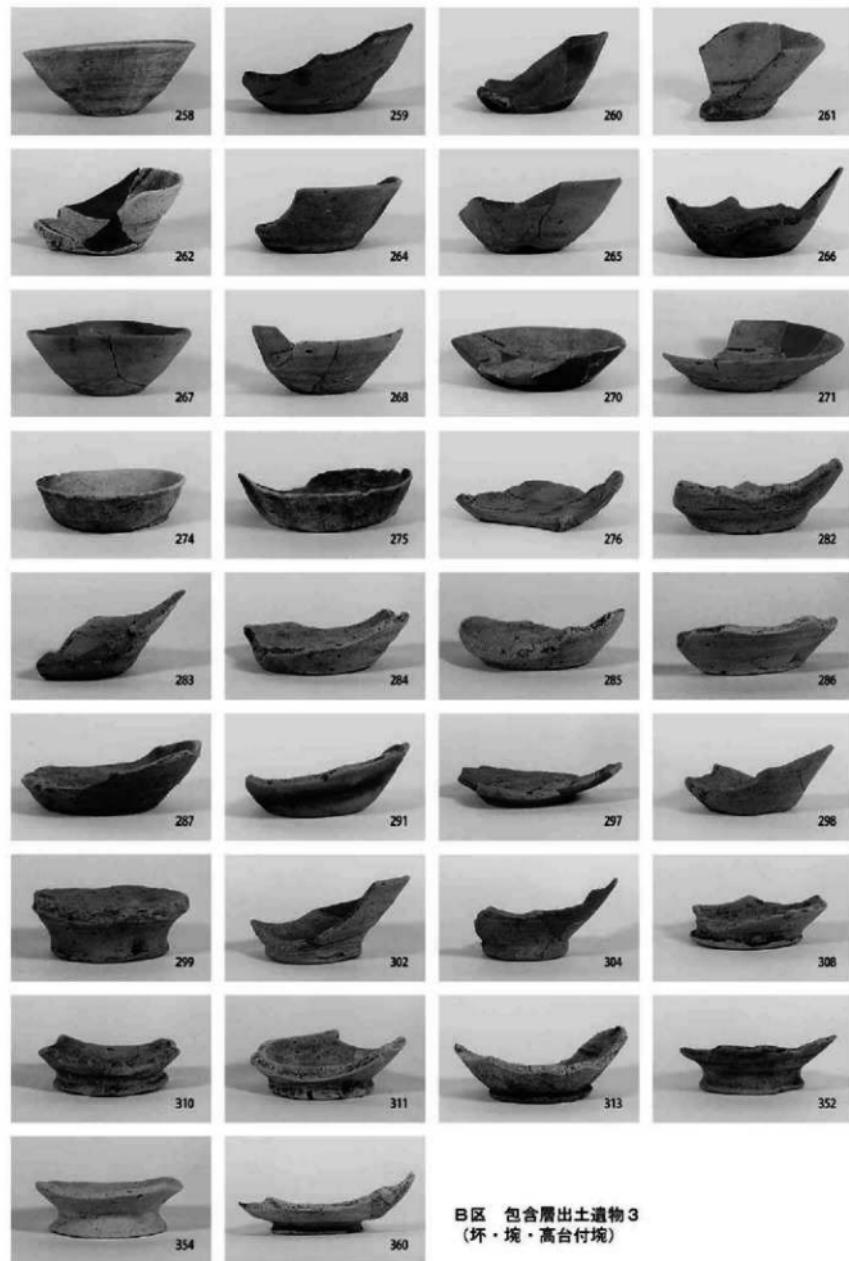
B区 土坑内出土遺物



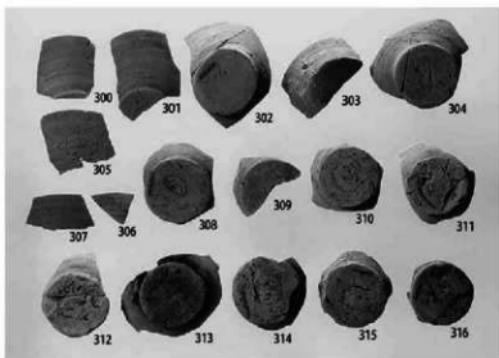
B区 包含層出土遺物1  
(土師皿の内面)



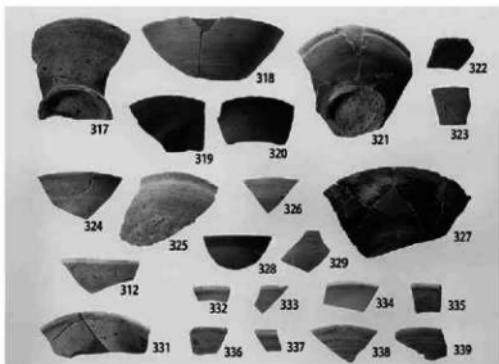
B区 包含層出土遺物2  
(土師皿の底部外面)



B区 包含层出土遗物3  
(坏・块・高台付块)



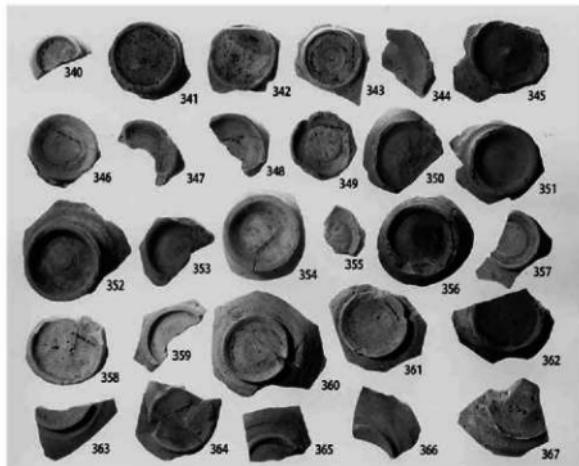
B区 包含層出土遺物4  
(土師壺の底部外面)



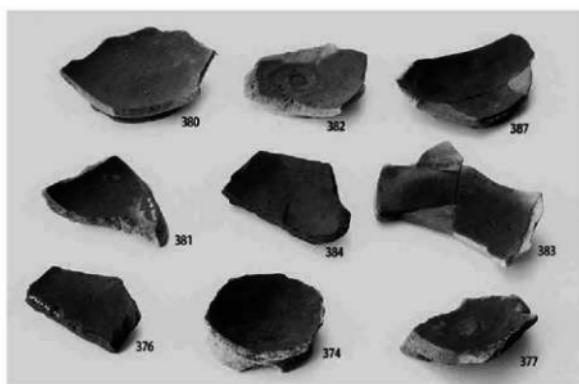
B区 包含層出土遺物5  
(高台付壺)



B区 包含層出土遺物6 (壺・高台付壺)



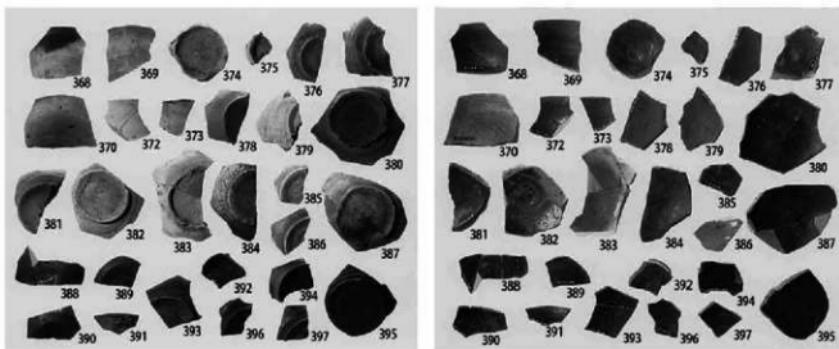
B区 包含層出土遺物7  
(高台付焼の底部外面)



B区 包含層出土遺物8  
(黒色土器：内黒)



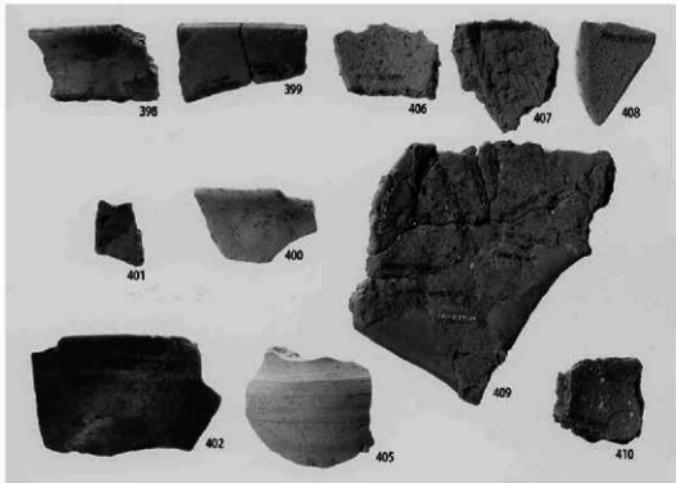
B区 包含層出土遺物9  
(黒色土器：両黒)



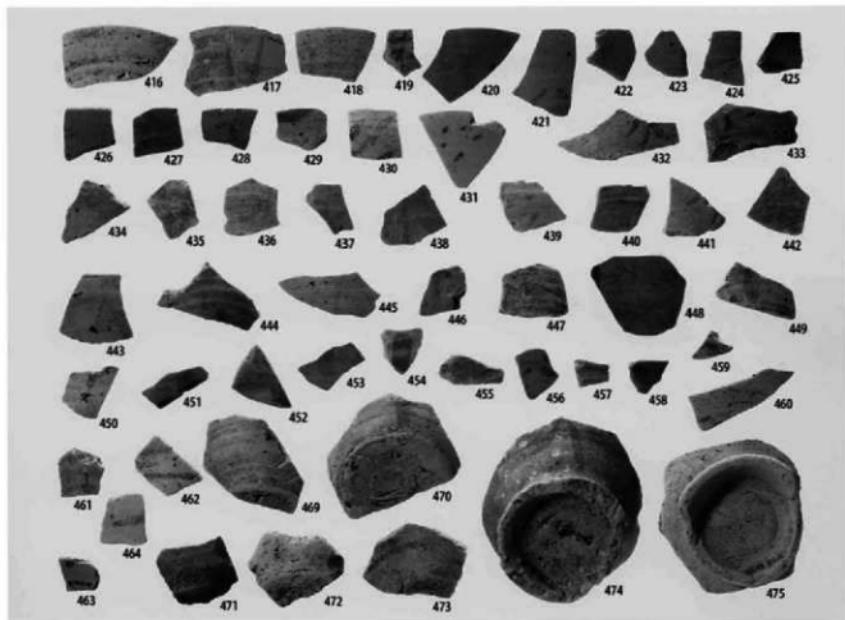
B区 包含層出土遺物10（黒色土器、左：外面、右：内面）



B区 包含層出土遺物11（鍋・鉢）



B区 包含層出土遺物12（壺・鉢・壺・布痕土器）



B区 包含层出土遗物13 (墨书土器)



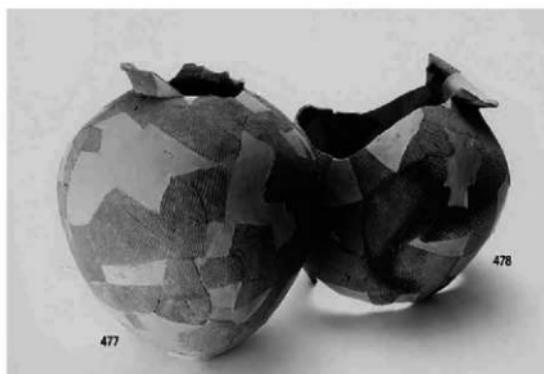
B区 包含层出土遗物14  
(墨书土器「山水」、坏)



B区 包含层出土遗物15  
(墨书土器「山水」、坏)



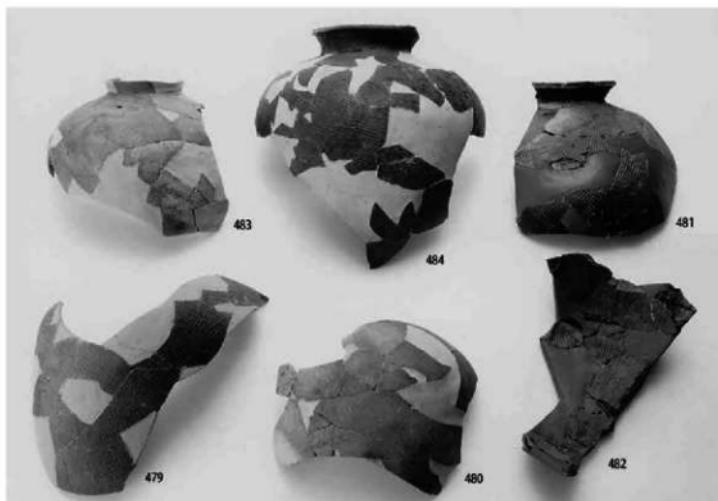
B区 包含層出土遺物16  
(須恵器: 大壺)



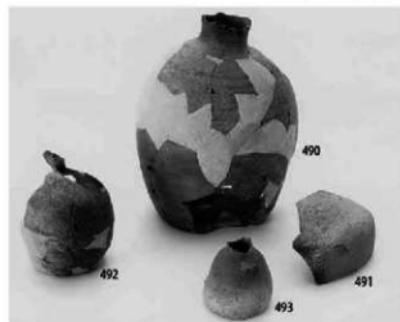
B区 包含層出土遺物17  
(須恵器: 壺)



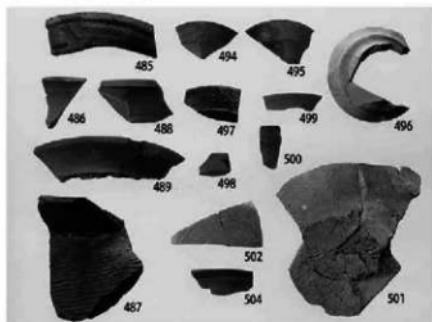
B区 包含層出土遺物18  
(須恵器: 横瓶)



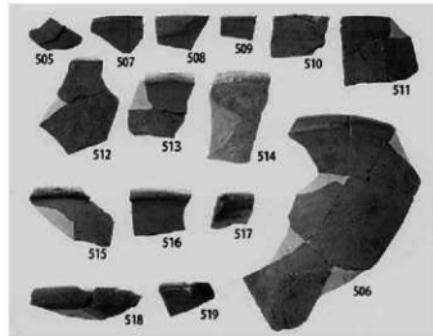
B区 包含層出土遺物19（須恵器：壺）



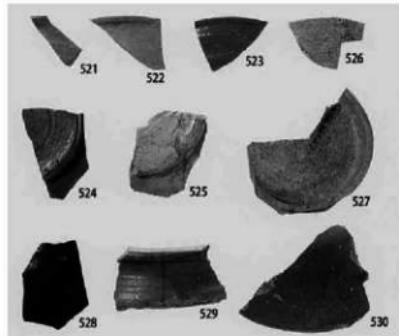
B区 包含層出土遺物20（須恵器：壺）



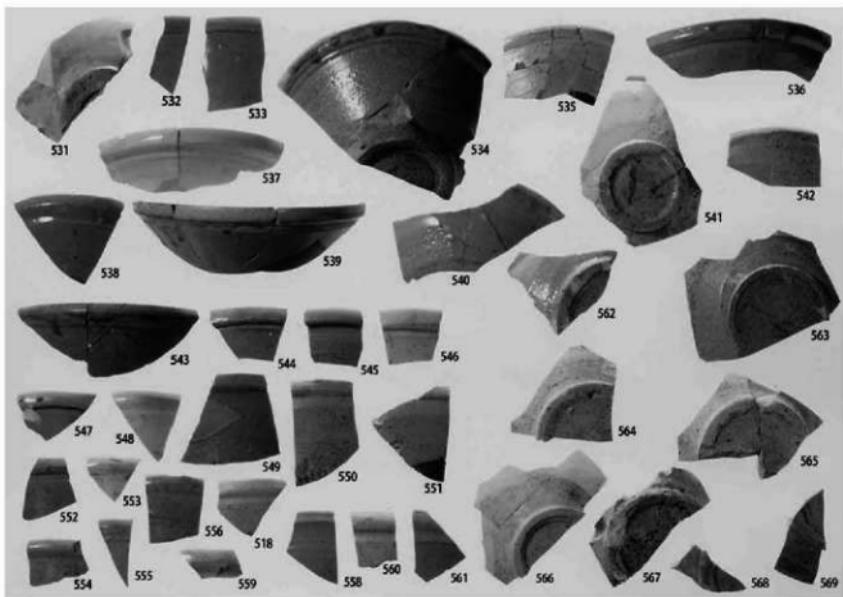
B区 包含層出土遺物21（須恵器：壺・壺・坏）



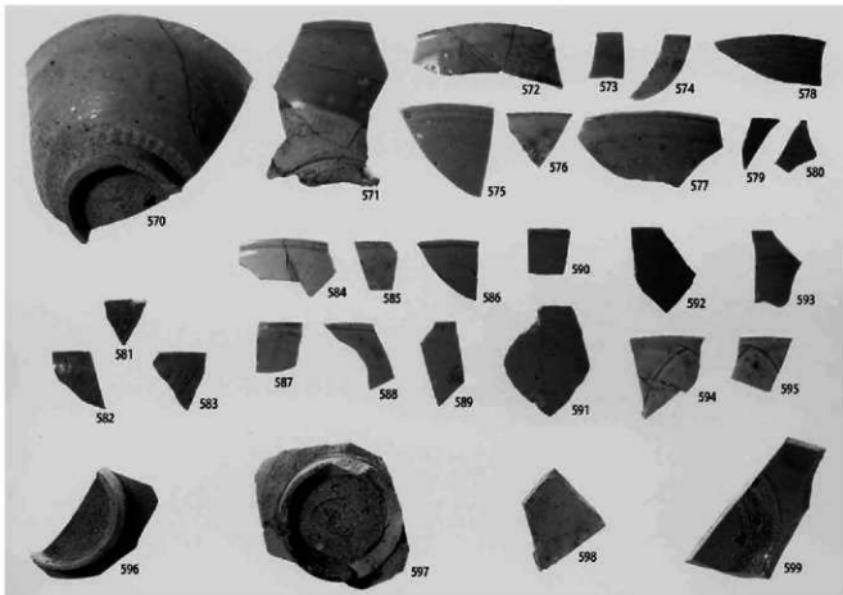
B区 包含層出土遺物22（束縛系須恵器）



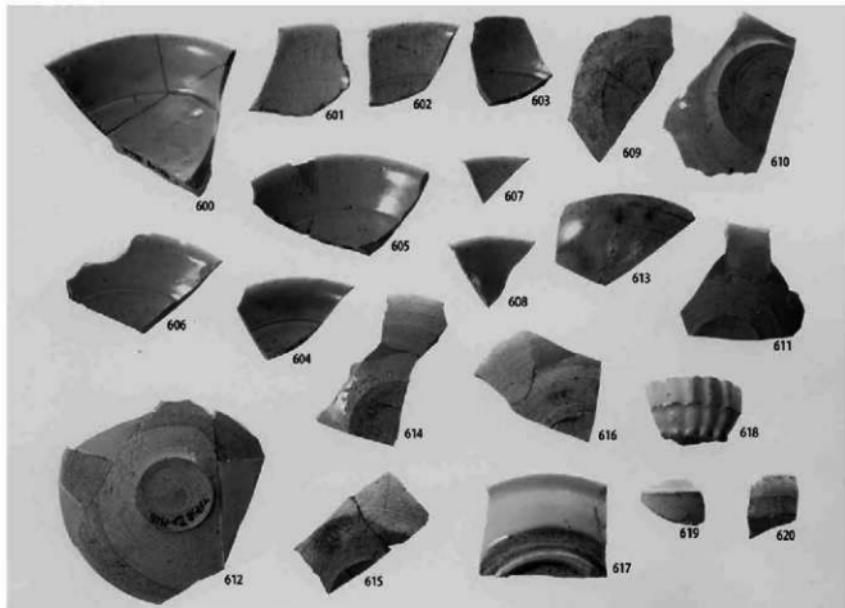
B区 包含層出土遺物23（綠釉・灰釉etc.）



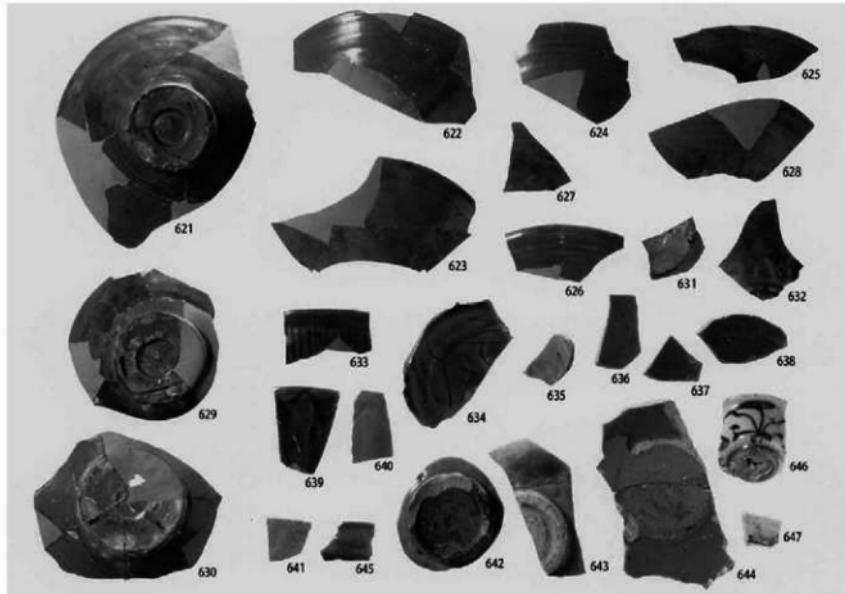
B区 包含層出土遺物24 (白磁碗A~C類)



B区 包含層出土遺物25 (白磁碗D~I類)

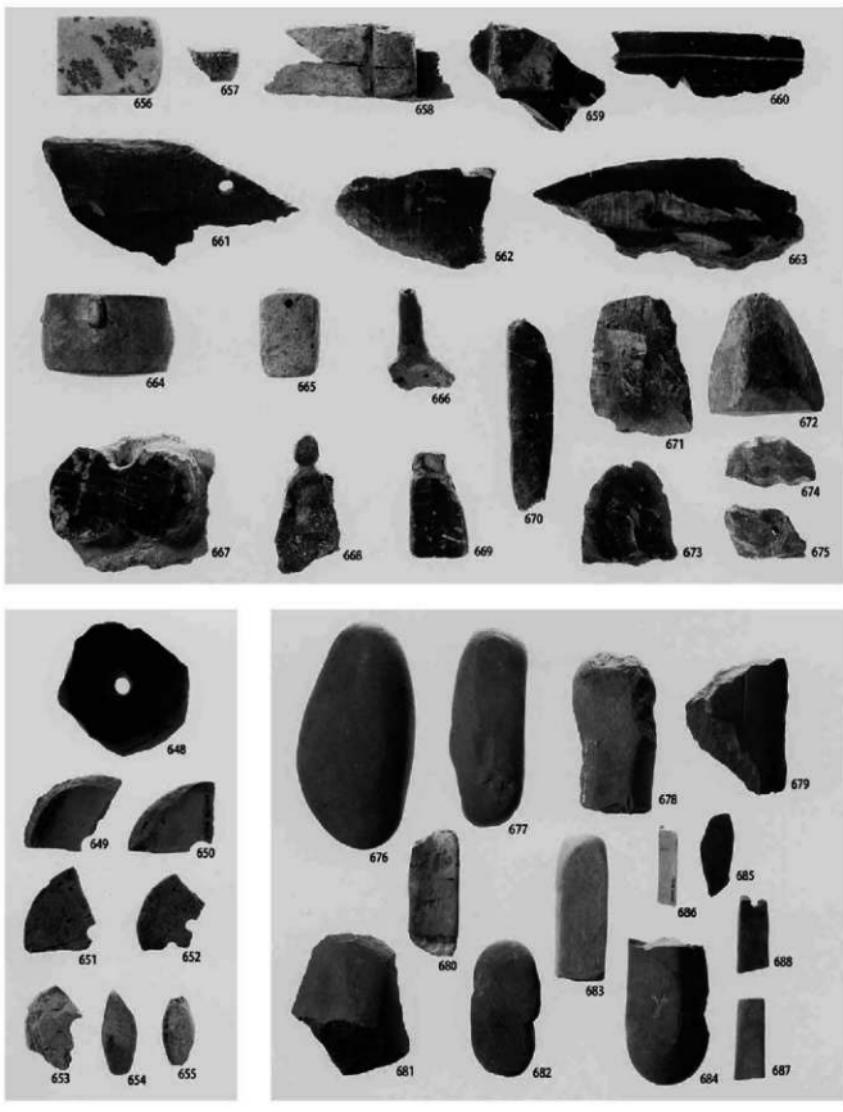


B区 包含层出土遗物26 (白磁皿・白磁合子)



B区 包含层出土遗物27 (青磁・青花)

図版34



B区 包含層出土遺物28・29・30・31  
上段28：石製鎌具・滑石製品  
中段29：紡錘車・土錐  
中段30：砥石  
下段31：刀子



B区 近世の遺物1（壺・鉢・擂鉢・蓋）



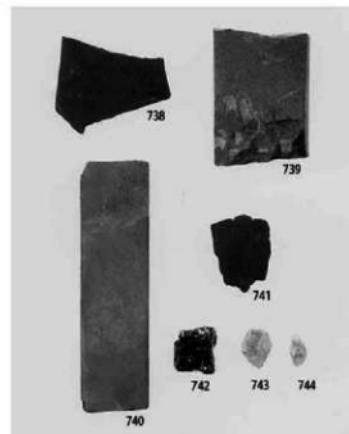
B区 近世の遺物2（碗・筒形碗・火入れ・皿）



B区 近世の遺物4（碗・筒形碗・小壺・皿・鉢・擂鉢）



B区 近世の遺物5（5号土坑出土、茶臼）



B区 近世の遺物6（砥石・石盤・火打石）

# 報告書抄録

ふりがな	ふでなしいせき							
書名	筆無遺跡							
副書名	都城東環状線 今町工区 地域連携推進事業（地方道）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第166集							
執筆・編著者名	福田泰典・飯田博之・丹俊詞・柳田裕三							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2008年2月22日							
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
ふでなしいせき 筆無遺跡	宮崎県都城市 今町 9270-3番地他 (A区) 9296-1番地他 (B区)	31° 41' 50" 付近	131° 02' 02" 付近	2003.11.15 ~ 2004.03.25	2,400m <sup>2</sup>	都城東環状線 今町工区 地域連携推進 事業（地方道）		
				2004.01.15 ~ 2004.03.25 (B地点)	1,280m <sup>2</sup>			
				2004.07.21 ~ 2004.12.22 (C地点)	3,400m <sup>2</sup>			
				2004.06.07 ~ 2005.02.26 (D1地点)	5,600m <sup>2</sup>			
				2005.06.13 ~ 2006.12.20 (D2地点)	4,600m <sup>2</sup>			
種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物	特記事項			
散布地	縄文時代 (後期～晩期)	・土坑 3基		・縄文土器（後期・晩期）	・土坑内から縄文土器がまとまって出土			
	弥生時代 (中期～後期)	・堅穴住居跡 3軒 ・土坑		・弥生土器（甕・壺）	・意図的配置が考えられる3軒の堅穴住居跡を検出			
	古代～中世 (9c～14c代)	・無立柱建物跡 5棟 ・溝状遺構 6条 ・土坑 57基 ・周溝墓 3基 ・土坑墓 1基 ・道状遺構 3条 ・竪状遺構		・縄輪陶器（碗・皿） ・灰釉陶器（皿） ・墨書き器 ・白磁（碗・皿・合子） ・青磁（碗・皿） ・石製品（鍛具・滑石製石鏡） ・金楓製品（刀子）	・古代と中世の方形無立柱建物跡を検出 ・削り出した出入口を伴う溝状遺構を検出 ・古代の周溝墓を3基検出 ・土師皿、白磁碗、刀子を副葬する土坑墓1基を検出			
	近世	・無立柱建物跡 2棟 ・溝状遺構 2条 ・土坑 8基		・陶磁器（碗・皿・甕・粗鉢・壺etc.） ・石製品（茶臼・砥石・火打石）	・無立柱建物跡2棟、溝状遺構2条、「窓」と考えられる大型土坑4基を2基ずつのセットで検出			

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第166集

**筆無遺跡**

都城東環状線 今町工区 地域連携推進事業（地方道）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年2月22日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 濱印刷センタークロダ

〒880-0022 宮崎市大橋2丁目175  
TEL 0985-24-4351 FAX 0985-27-9337

---